三重県埋蔵文化財調査報告 235

野篠里中遺跡発掘調査報告

—三重県度会郡玉城町野篠所在—

２００２年３月

三重県埋蔵文化財センター

序

三重県度会郡玉城町には、周知されている遺跡が約400か所あります。このことは、古代から人々が居住し、歴史と文化を築いてきた証拠だと思います。

今回発掘調査しました野篠里中遺跡は、玉城町蚊野丘陵縁辺部に広がっている遺跡です。昭和48・49年には、この近くの仲垣内遺跡・月よべ遺跡・赤垣内遺跡で発掘調査が行われ、弥生時代の住居跡や中世の建物跡等が発見されています。野篠里中遺跡は、この3遺跡ときわめて有機的なつながりをもった遺跡とみられ、昔の人々が暮らした足跡を今回の調査で解明できるものと予想されます。

私どもは、これらの貴重な文化財を祖先の残した歴史遺産として保護し、後世に伝えていくと共に、今後の文化の向上と発展の基礎として活用し、公開していかなければなりません。

（主）伊勢多気線緊急地方道路整備工事に伴い、遺跡の一部が現状変更されることになり、記録保存を図ることになりました。これを契機に、本書が玉城町における郷土史研究並びに三重県の古代史研究の一助となるとともに、文化財保護の啓蒙にお役立ていただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に当たりましてご協力を賜りました玉城町野篠・山神・佐田・田丸の皆様方をはじめ地元の関係者、及び三重県県土整備部道路保全課、南勢志摩県民局伊勢建設部、(財）三重県農業開発公社、玉城町教育委員会などの関係各位に厚く感謝申し上げます。

平成14年3月

三重県埋蔵文化財センター
所長　桂　　川　　哲

例　言

1　本書は、三重県度会郡玉城町野篠に所在する野篠里中遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は下記の体制で行った。

・　調査主体　三重県教育委員会

・　調査担当　三重県埋蔵文化財センター

調査第一課　技師　萩原義彦

主事　筒井英俊

・　作業委託　（財）三重県農業開発公社

主幹　宮崎達也

3　本書の作成は、上記担当者の他調査第一課及び資料普及グループが行った。遺構・遺物の写真撮影は萩原が行い、執筆及び全体の編集は萩原・筒井が行った。

4　本書で示す方位は、国土調査法第Ⅵ座標系を基準とし、座標北を用いた。真北は、座標北のN0°20′W、磁北はN6°40′Wである。

5　本文で示す遺構表示略記号は、下記の通りである。

ＳＡ：塀（柵）　ＳＢ：掘立柱建物　ＳＤ：溝

ＳＥ：井戸　ＳＨ：竪穴住居　ＳＫ：土坑

6　本書で報告した記録及び出土遺物は全て三重県埋蔵文化財センターで保管している。

7　発掘調査は、三重県教育委員会が三重県県土整備部より執行委任を受けて、平成12年度（主）伊勢多気線緊急地方道路整備工事に伴って実施した。

8　調査に当たっては、三重県県土整備部道路保全課・南勢志摩県民局伊勢建設部・玉城町教育委員会及び地元の方々の協力を得た。

9　スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本　文　目　次

Ⅰ　前言……1
　1　調査の契機……1
　2　調査の体制……1
　3　調査の経過……1
　4　調査の方法……2
　5　文化財保護法にかかる諸通知……2
　6　遺跡の名称について……2
Ⅱ　位置と環境……3
　1　地理的環境……3
　2　歴史的環境……3
Ⅲ　遺構……8
　1　基本的層位及び地形……8
　2　検出遺構……8
Ⅳ　遺物……25
　1　弥生～古墳時代……25
　2　奈良時代……30
　3　鎌倉～室町時代……30
　4　江戸時代……33
Ⅴ　まとめ……34
　1　弥生～古墳時代……34
　2　鎌倉時代以降……34
　3　課題……35

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図
第２図　遺跡周辺地形図
第３図　調査区位置図
第４図　Ａ・Ｂ・Ｃ調査区遺構平面図
第５図　Ａ・Ｂ・Ｃ調査区土層図
第６図　Ａ・Ｂ・Ｃ調査区略図
第７図　ＳＨ６平面・断面図
第８図　ＳＨ７平面・断面図
第９図　ＳＨ25平面図
第10図　ＳＢ36・ＳＡ42平面・断面図
第11図　ＳＢ37平面・断面図
第12図　ＳＢ39平面・断面図
第13図　ＳＢ40平面・断面図
第14図　ＳＢ41平面・断面図
第15図　ＳＥ22平面・断面図
第16図　調査区略図
第17図　出土遺物実測図
第18図　出土遺物実測図
第19図　出土遺物実測図
第20図　出土遺物実測図
第21図　出土遺物実測図

表　目　次

第１表　遺構一覧表
第２表　出土遺物観察表
第３表　出土遺物観察表

写真図版目次

図版１　Ａ地区完掘状況（南から）
Ａ地区完掘状況（北から）
ＳＥ 22 半裁状況
図版２　Ｂ地区完掘状況（北から）
Ｂ地区完掘状況（南から）
ＳＢ 37 完掘状況（南から）
図版３　ＳＨ７完掘状況（南から）
ＳＨ６完掘状況（南から）
Ｃ地区完掘状況（南から）
図版４　Ｃ地区完掘状況（北から）
ＳＨ 25 遺物出土状況（南から）
図版５　ＳＨ 25 完掘状況（南から）
ＳＨ 23 完掘状況（南から）
図版６　出土遺物
図版７　出土遺物
図版８　出土遺物

Ⅰ 前　　言

1　調査の契機

本宮・新宮・那智の神々の鎮座する熊野三山への参詣路として西からの和歌山県側の紀路と東からの三重県側の伊勢路があり、両者をもって熊野往還道と呼ばれる。現在の県道伊勢多気線は、かつての田丸から新宮までの伊勢路にあたる。そのため国道42号線から伊勢方面に往還するルートとして非常に使用頻度が高い。しかしながら、この道路は幅も狭く見通しが悪い。また、交通量が多く交通事故の多発地域でもある。そのため地元の要望等によって県道の拡幅工事が行われることになった。今回、平成12年度主要地方道伊勢多気線緊急地方道路整備事業の工事予定地に周知の遺跡である野篠里中遺跡が含まれることが分かった。これを受けて、文化財保護の目的で工事対象面積3,100㎡の範囲で遺跡の試掘調査を実施した。その結果、1,500㎡が本調査の対象となった。そこで、その取り扱いについて保護に努めるように、県土整備部道路保全課と三重県埋蔵文化財センターで協議を重ねた。その結果、現状保存が困難であるとしてやむなく発掘調査を実施し、記録保存を図ることになった。

2　調査の体制

発掘調査は平成12年11月13日から開始した。11月21日から重機による表土掘削、29日から作業員による遺構掘削を開始した。なお、土工部門を(財)三重県農業開発公社（担当宮崎達也氏）に委託した。

発掘調査には地元の方をはじめ、たくさんの方々に参加していただいた。調査が滞りなく終了できたのもひとえに作業に従事していただいた方々のご協力の賜物である。ここにご芳名を記して感謝する。

板倉美代子、浦田信子、大橋正子、長キヨ子、
上出和枝、河辺トミ子、北川みよ子、北出吉三、
北出千代子、高井ふさゑ、出口茂夫、出口明子、
出口保子、中村茂子、平生己重子、平生よ志、
福井かねよ、松月菊枝、松月美和、村田縫子、
村林しづ子、藪紀子（五十音順、敬称略）

3　調査の経過

＜調査日誌抄より＞

平成12年11月20日（月）雨の為作業中止。

11月21日（火）B地区表土掘削。溝・土坑・柱穴等見える。

11月22日（水）午前に表土掘削終了。午後から地区設定を行う。半月形の調査区の為、難航。

11月24日（金）仮設プレハブに泥棒が入る。農業開発公社（宮崎）・埋蔵文化財センター（調査第1課長田阪）にて対応。午後から略図作成。

11月27日（月）略図作成及び土量計算。

11月28日（火）三重県埋蔵文化財専門担当者会議。

11月29日（水）作業員投入。仮設テント等準備を行う。終了後遺構検出の作業を行う。

11月30日（木）午前中、遺構検出。午後から調査第1課会議。

12月1日（金）遺構検出を行う。現代の攪乱坑から順次掘削。

12月4日（月）包含層掘削、遺構検出。

12月5日（火）遺構検出、柱穴・溝等掘削開始。

12月6日（水）現代井戸掘削終了。竪穴住居とみられる遺構を掘削開始。

12月7～8日（木～金）その他の遺構検出及び掘削。

12月11日（月）B地区遺構検出及び掘削。A地区重機による表土掘削開始。

12月12日（火）B地区遺構清掃にかかる。A地区引き続き表土掘削。

12月13日（水）B地区遺構清掃後写真撮影。

12月14日（木）B地区3m四方の割り付けを行う。断面図作成。

12月15日（金）平面図実測（1／20）。レベル入れを行う。

12月18日（月）A地区表土掘削及び地区設定を行う。

12月19日（火） 作業員再投入。調査区周辺清掃。遺構検出にとりかかる。
12月20日（水） 柱穴・土坑・溝等の遺構検出及び掘削。
12月21～22日（木～金） 引き続き遺構検出及び遺構掘削。
12月25日（月） 写真撮影の為、清掃にとりかかる。
12月26日（火） 午前中に写真撮影を行う。午後から平面図実測の用に3m四方の割り付けを行う。
12月27日（水） 平面図実測を行う。
12月28日（木） 実測図にレベルを入れる作業及び断面図作成。
平成13年1月4～10日（木～水） 室内にて図面等の整理作業。
1月11日（木） A地区井戸断ち割り作業。写真撮影後実測（1／20）。
1月12日（金） C地区表土掘削開始。途中地元からの要請にて掘削中止。
1月15～17日（月～水） 室内にて整理作業。
1月18日（木） C地区表土掘削再開。
1月19日（金） 地区設定及び略図作成。
1月22日（月） 作業員再投入。遺構検出及び掘削。竪穴住居及び溝など。
1月23日（火） 室内整理作業（遺物）。
1月24日（水） 遺構検出及び遺構掘削。
1月25・26日（木・金） 雨の為、作業中止。
1月29日（月） 遺構検出及び遺構掘削。
1月30日（火） 清掃後写真撮影及び竪穴住居の平面図作成。
1月31日（水） 調査第1課会議。
2月1日（木） 雨の為、作業中止。
2月2日（金） 調査区全体の1／20の平面図実測。
2月5日（月） 平面図にレベルを入れる。
2月6日（火） 遺物等センターに運ぶ。機材撤収。
2月14日（水） 現地引渡し。伊勢建設部に。

4 調査の方法

調査における地区割りは4m×4mのグリッドを設定し、東西方向をアルファベット（西から東にかけてA・B・C・—）、南北方向を数字（1・2・3・—）で表示した。そして、遺構面に影響のない範囲で表土除去を重機で行い、その後人力による掘削・調査を進めた。また、3m×3mの調査区平面図及び土層断面図の実測は、1／20で行った。個別の詳細図の実測は1／10で行った。なお、3mメッシュも4mメッシュも、任意の東西方向、南北方向で割り付けを行った。基準点を後から付した。

また、遺構番号はA・B・C地区を通じて1番から付け、遺構検出時における遺物については北西隅に所在する地区ナンバーによって取り上げた。

5 文化財保護法等にかかる諸通知

文化財保護法（以下、「法」）等にかかる諸通知は、以下により行っている。

・法に基づく三重県文化財保護条例第48条第1項（県教育長宛）
平成12年7月31日付道整第123号
・法第58条の2第1項（県教育長宛）
平成12年11月13日付教埋第262号
・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（伊勢警察署長あて）
平成13年3月7日付教生第229-18号（県教育長通知）

6 遺跡の名称について

今回、発掘調査した野篠里中遺跡は、玉城町大字野篠小字内ノ口・鳥取山・村ノ内に所在する。本来の里中遺跡は、県道を挟んだ南側に位置し、字村ノ内である。また、地籍図字鳥取山には他の遺跡が所在し、鳥取山遺跡と名付けられている。かつて皇學館大學考古学研究会によって弥生時代中期後半の土器及び中世墓とみられる人骨の入った土師器鍋が発見されている①。今回の調査地と周知の遺跡である里中遺跡は、別の場所であるが遺跡の範囲を拡大することとした。また、里中遺跡という名称は県内で多く見られるため別の名称として野篠里中遺跡とした。

（筒井英俊）

①『玉城町南部の遺跡』（皇學館大學考古学研究会 1981年）

Ⅱ　位置と環境

1　地理的環境

南伊勢地方の大台山系に源を発した二大河川、櫛田川と宮川は、中流域において顕著な河岸段丘を形成しながら北東流し、山間部から抜け出た下流地域において過去に幾度も流れを変え広大な氾濫平野を形成してきた。野篠里中遺跡(1)は、東経136°37′05″、北緯34°28′59″に位置し、行政区分上で三重県度会郡玉城町野篠に所在する。玉城町は、この二大河川にはさまれた地域にあり、町域のほぼ中央部をさらに外城田川という河川が貫流している。

地質学的にみてみると三重県を二分する中央構造線と呼ばれる大断層がある。その中央構造線が玉城町積良・山神・宮古・中角の地域において東西方向に横断しているとみられる。そのため、この地域を形成する地質は、領家変成帯・三波川帯・沖積統に分かれる。[1]

中央構造線から南側には、三波川帯がある。構成される岩石は、主に結晶片岩類によるが断続的に御荷鉾緑色岩類が含まれる。結晶片岩類には、チャートなどが含まれ、御荷鉾緑色岩類には、角閃岩及び石英片岩、石墨千枚岩、石灰岩、緑泥片岩が含まれる。一方北側では、白亜紀にかけて形成された領家変成帯がある。構成される岩石は、花崗岩・花崗閃緑岩・片麻岩・変輝緑岩等である。

また、沖積統は、領家変成帯をほぼ分断する形で宮川や外城田川といった河川による堆積作用によって形成された地層であり、固結されていない礫、砂、シルト、粘土によって成り立つ。その表土層は水田などに利用される。当遺跡の所在地は、領家変成帯によって形成された蚊野丘陵上に位置している。

野篠周辺は外城田の丘陵の東端にあって北に外城田川、東に三郷川が流れ、古代人にとっては絶好の生活の場であった。当遺跡は、標高30～35m前後の蚊野丘陵南麓に立地し、眼下の現水田面との比高差は約10mをはかる。現況は、荒蕪地、竹林、畑地となっている。東に田丸城が遠望できる。

2　歴史的環境

当遺跡周辺には、旧石器時代から近世に至るまでの各時代のさまざまな遺跡が分布している。

旧石器時代の遺跡としては、カリコ遺跡[2](2)、上地山遺跡[3](3)が有名である。カリコ遺跡では、ナイフ型石器をはじめ、舟底形石器、掻器、尖頭器が出土している。上地山遺跡では、楔形石器、石核、剥片、チャート製の小型ナイフ形石器、細石刃核、掻器などが出土している。当時期にかけての遺跡は、当地周辺に多くみられだけでなく、ほぼ低平な台地、丘陵部と平野地の境界に多く見られている。

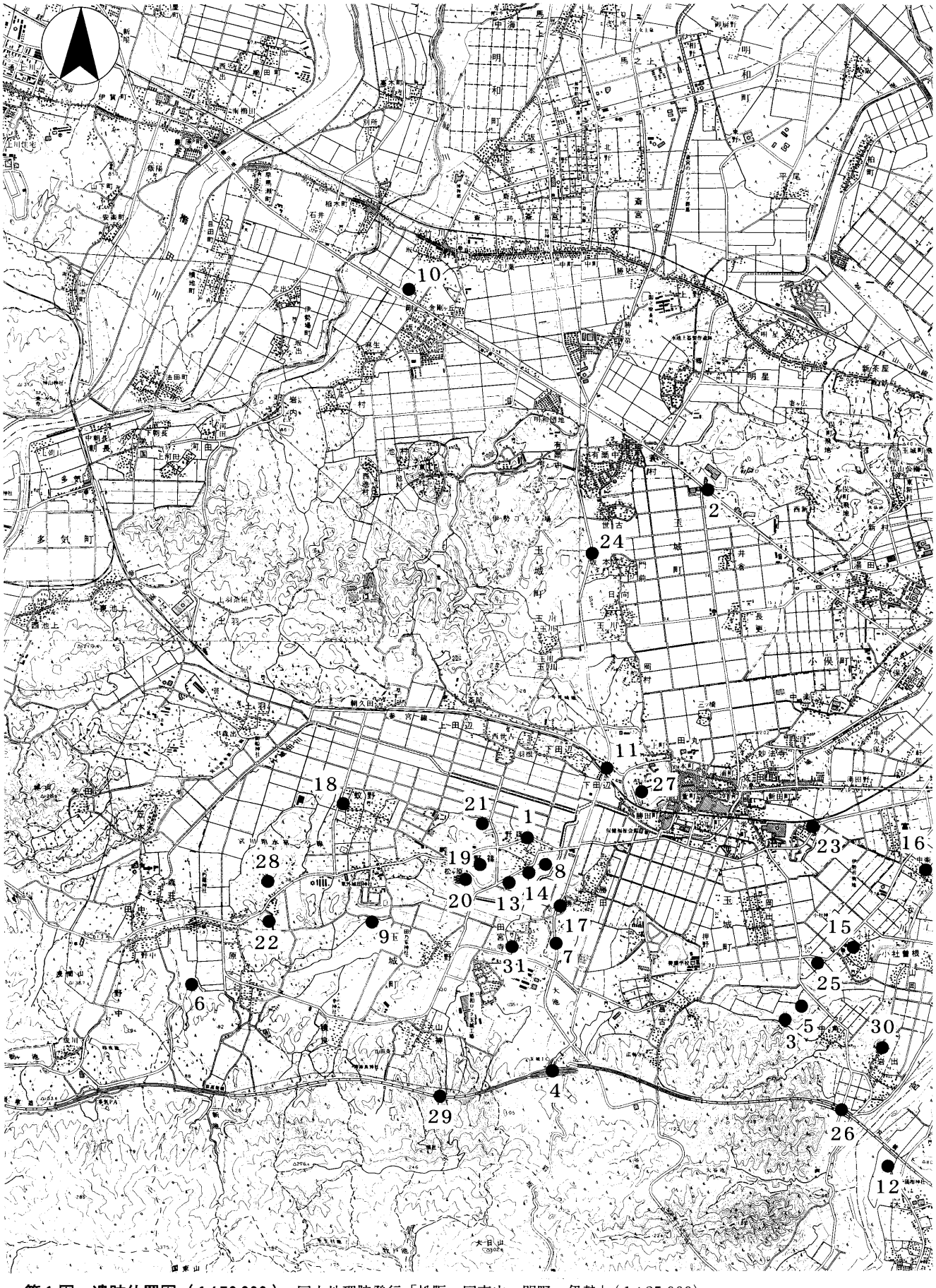
縄文時代の遺跡には、早期後半の楠ノ木遺跡[4](4)をはじめとして中期ごろの明豆遺跡[5](5)、後期頃には,遺跡数が多くみられ庄出遺跡[6](6)、明豆遺跡などがある。晩期に至っては、上ノ山遺跡[7](7)がある。

弥生時代の遺跡には、前期後半頃である仲垣内遺跡[8](8)、山殿西遺跡[9](9) と上ノ山遺跡がある。近隣地域では、明和町金剛坂遺跡(10)[10]をはじめとして伊勢市大藪遺跡[11]、同市二ッ池西遺跡[12]、同市丸山遺跡[13]等がある。

とりわけ蚊野丘陵の東端に立地する仲垣内遺跡では土坑1基、及び遺物では壺・甕がみられる。上ノ山遺跡では、平成3年の調査の結果、南勢地方で初めて竪穴住居1棟が確認された。

中期になると遺跡の数も増加している。上地山遺跡、波瀬B遺跡[14](11)、小俣町離宮院跡[15]、伊勢市中ノ垣内遺跡[16](12)、上ノ山遺跡、鳥羽市贄遺跡[17]、おばたけ遺跡[18]等がある。上地山遺跡で竪穴住居跡が4棟、上ノ山遺跡と波瀬B遺跡では、方形周溝墓が発見されている。中ノ垣内遺跡、贄遺跡、おばたけ遺跡では竪穴住居がみつかり、遺物も多く出土している。

後期に入ると、仲垣内遺跡をはじめとして赤垣内遺跡[19](13)、月よべ遺跡[20](14)、小社遺跡(15)21、伊勢市隠岡遺跡[22]、中楽山遺跡[23](16)、野垣内遺跡24、勝田遺跡[25](17)、大藪遺跡など多くの遺跡が存在し、発掘調査が行われている。仲垣内遺跡では後期の竪穴住居跡が3棟及び壺、高杯が出土している。蚊野丘陵の東端に立地する月よべ遺跡では、方形周溝墓が3基見つかっている。その中から壺、高杯、甕等が

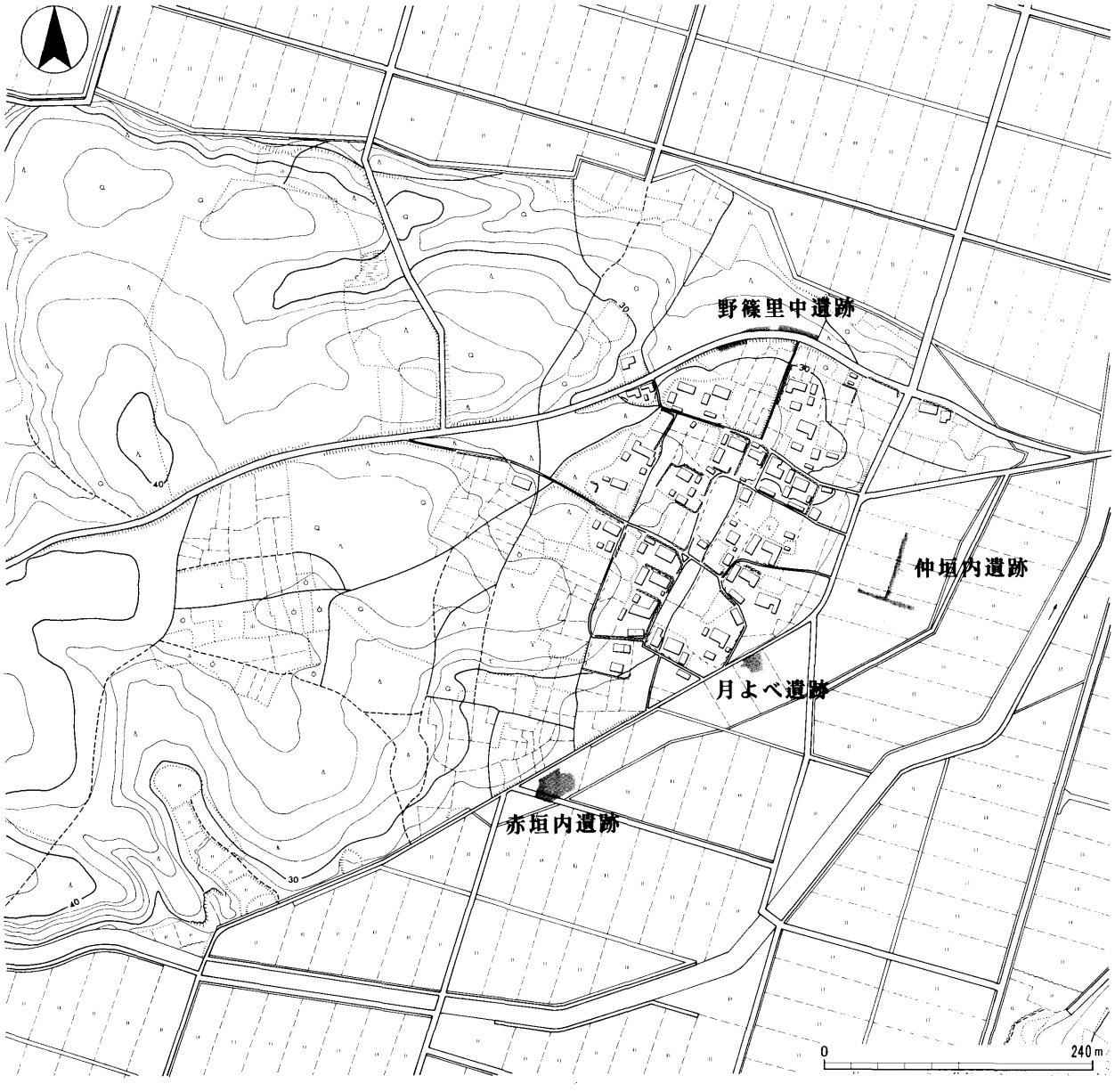


第１図　遺跡位置図（1/50,000）　国土地理院発行「松阪・国東山・明野・伊勢」（1/25,000）

発見されている。蚊野丘陵の南麓に立地する赤垣内遺跡では、北東にある仲垣内遺跡と同様竪穴住居が確認されている。遺物には、石包丁が出土している。これらの遺跡は同じ集落（野篠）内にあり、野篠里中遺跡でも弥生時代後期末の竪穴住居が検出され、弥生土器壷・甕・高杯が出土した。当遺跡の遺構・遺物の状況と、月よべ・赤垣内・仲垣内遺跡と場所が近いということから、関連をもった遺跡か同一集落の遺跡ではないかと予想される。

また、宮川左岸の段丘中位面上に立地する小社遺跡でも、竪穴住居と掘立柱建物が見つかっている。遺物としては、弥生土器の壺・高杯、磨製石斧等が発見されている。遺物の大半が弥生時代後期以降に属することから、小社遺跡の中心はこの時期にあるかもしれない。その当時の定住生活の一端がうかがえる。さらに昭和59年に発掘調査された隠岡遺跡は、45棟もの竪穴住居を検出し、遺物には、壺・高杯・甕等が出土している。

続く古墳時代は、小社遺跡で前期古墳に特有の副葬品である石釧が発見されている。現在、町内には180基（かつて270基）前後の古墳が確認されているが、そのすべてが後期のものであると考えられている。野篠周辺の古墳をみてみると当遺跡から西方に所在する稲生古墳群[26]（18）、宮西古墳[27]（19）、狐山古



第2図　遺跡周辺地形図（1／1,000）

墳[28](20)、赤坂古墳[29](21)などがある。

飛鳥・奈良時代の遺跡としては、原窯跡群[30](22)がある。全10基のうち土採りや開墾により8基が消滅したが、残りの2基が三重大学によって発掘調査されている。この調査では、7世紀の終わりから8世紀の初めにかけてのものと思われる須恵器が確認されている。

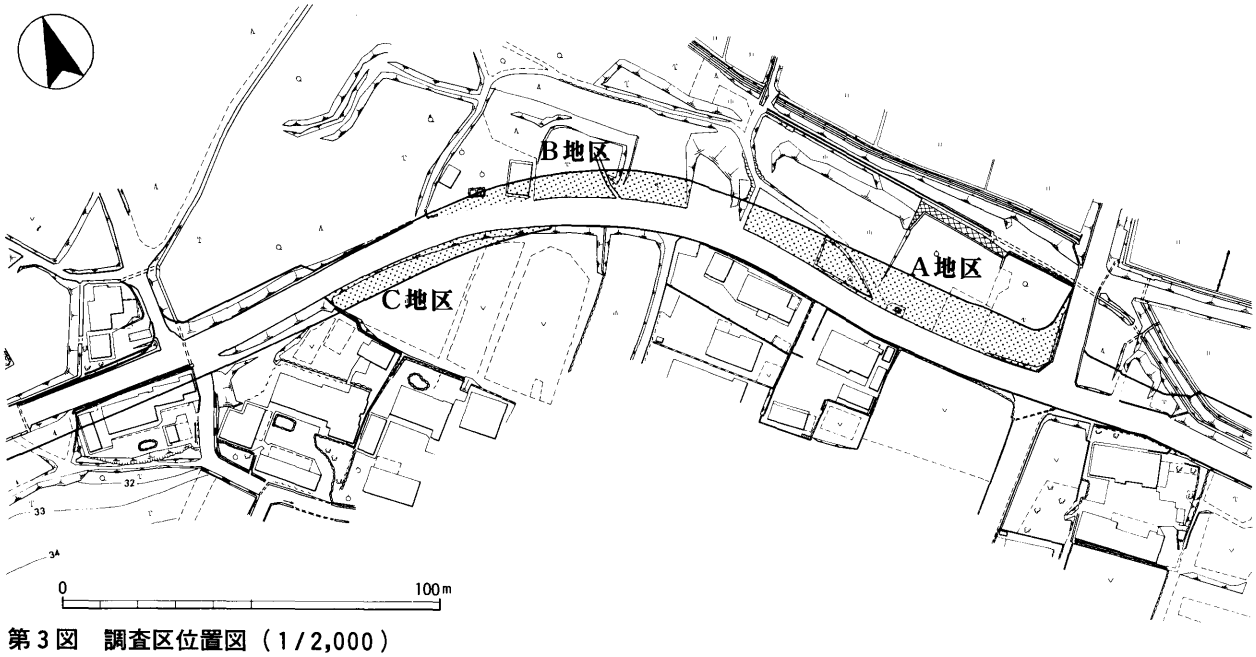
平安時代の遺跡では、すでに前述した仲垣内遺跡で掘立柱建物2棟、赤垣内遺跡では掘立柱建物8棟と土坑1基が確認されている。

平安時代の終わりから室町時代にかけては確認されている遺跡数は多くなる。前述した楠ノ木遺跡、波瀬B遺跡、銚子口遺跡[31](23)、砂谷遺跡[32](24)、上黒土遺跡[33](25)、蚊山遺跡[34](26)などで発掘調査されている。

中世以降になると城館がつくられた。田丸城跡(27)の他、坊主山館跡(28)、山神城跡[35](29)、岩出城跡(30)などがあり、また、御船殿遺跡(31)内にも中世城館と思われる土塁が存在している。田丸城跡は、延元元年〔1336〕に北畠親房・顕信親子によって築城されて以来、南朝方の拠点となり、南北朝合一後も北畠国司の支配下に置かれた。野篠里中遺跡では、鎌倉～室町時代の掘立柱建物や柵(塀)が検出され、土師器・山茶椀が出土した。当遺跡が、弥生時代後期から中世に続いて生活していたことは明らかになった。中世城館との関係については、今回の調査成果から明らかにすることは難しい。永禄12年(1596)、織田信長の大河内城攻めに際し、和議において、次男信雄が城主となり、再び本格築城に取り組み、石積や堀など、現存の田丸城の基を築いた。その後、江戸時代の安定期に入り、紀州領となり、紀州家家老久野家1万石の知行地となった。[36]同町は、古代においては、神宮禰宜の荒木田氏が田辺、城田、湯田三郷の地域に勢力を張っていた。現在も内宮摂社、末社が多く点在しており、伊勢神宮との関係が極めて密接である。また、昔から水田の開墾が行われており、有田地区の田園地帯は、律令制下の条里制に基づいた区割りが行われていたことが伝えられている。[37]

野篠里中遺跡は、弥生時代後期から集落を形成し、中世を経て、現代に至る断続的な遺跡であり、それぞれの時代の遺跡との関わりを、その位置と考古資料等により今後明らかにしていければと考えている。

(筒井英俊)



第3図　調査区位置図(1/2,000)

[註]

①奥義次「第一章　考古　第一節　旧石器・縄文時代」(『三重県玉城町史』上巻　玉城町　1995年)
②世古且守・山澤義貴『カリコ古墳・カリコ遺跡発掘調査報告』(玉城町教育委員会　1972年)
奥義次「第一章　考古　第一節　旧石器・縄文時代」(『三重県玉城町史』上巻　玉城町　1995年)
③奥義次・大西素行・御村精治『上地山遺跡発掘調査報告書』(玉城町教育委員会　1985年)
皇學館大学考古学研究会『玉城町南部の遺跡』(1982年)
④伊藤裕偉『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発調査報告―第3分冊―　楠ノ木遺跡』(三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター　1991年)
⑤奥義次「第一章　考古　第一節　旧石器・縄文時代」(『三重県　玉城町史』上巻　玉城町　1995年)
⑥奥義次「第一章　考古　第一節　旧石器・縄文時代」(『三重県　玉城町史』上巻　玉城町　1995年)
⑦上村安生『上の山遺跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター　1992年)
⑧小玉道明・長谷川博他『昭和48年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査』(三重県教育委員会　1979年)
⑨大西素行「第一章　考古　第二節　弥生時代」(『三重県玉城町史』上巻　玉城町　1995年)
⑩山澤義貴・谷本鋭次『金剛坂遺跡』(明和町教育委員会 1971年)
田村陽一他『昭和59年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査』(三重県教育委員会　1985年)
川崎志乃・萩原義彦『金剛坂遺跡（第4次）・辰ノ口古墳群（第3次）発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター　1999年)
奥野実『金剛坂遺跡（第5次）・辰ノ口古墳群（第3次）発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター　2001年)
⑪『南勢バイパス埋蔵文化財調査報告－大藪遺跡－』(三重県教育委員会　1973年)
⑫大西素行「第一章　考古　第二節　弥生時代」(『三重県玉城町史』上巻　玉城町　1995年)
⑬岩中淳之「伊勢市域の弥生遺跡　宮川流域の弥生文化の様相」『三重その歴史と交流』(地方史研究協議会編　雄山閣　1989年)
⑭上村安生『波瀬B遺跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財セター　1992年)
⑮御村精治・榎本義譲『離宮院跡発掘調査報告』(小俣町教育委員会　1980年)
⑯高見宜雄・岩中淳之『昭和59年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査』(三重県教育委員会　1984年)
⑰松本茂一他『贄遺跡』(鳥羽市教育委員会　1975年)
松本茂一他『贄遺跡 - 第2次発掘調査報告 - 』(鳥羽市教育委員会　1987年)
⑱下村登良男・村上喜雄『おばたけ遺跡発掘調査報告』(鳥羽市教育委員会　1972年)
⑲小玉道明・長谷川博他『昭和48年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査』(三重県教育委員会　1979年)
⑳小玉道明・長谷川博他『昭和48年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査』(三重県教育委員会　1979年)
㉑大西素行「第一章　考古　第二節　弥生時代」(『三重県玉城町史』上巻　玉城町　1995年)
村上邦彦『小社遺跡』「歩跡　第2号」(皇學館大学考古学研究会 1971年)
㉒岩中淳之『隠岡遺跡発掘調査報告』(伊勢市教育委員会　1987年)
㉓下村登良男『昭和47年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査』(三重県教育委員会　1973年)
㉔下村登良男『昭和48年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査』(三重県教育委員会　1979年)
㉕倉田直純・東浩成『勝田遺跡発掘調査報告』(三重県教育委員会 1988年)
㉖前川嘉宏「第一章　考古　第三節　古墳時代」『三重県玉城町史』上巻（玉城町　1995年)
㉗前川嘉宏「第一章　考古　第三節　古墳時代」『三重県玉城町史』上巻（玉城町　1995年)
㉘前川嘉宏「第一章　考古　第三節　古墳時代」『三重県玉城町史』上巻（玉城町　1995年)
㉙前川嘉宏「第一章　考古　第三節　古墳時代」『三重県玉城町史』上巻（玉城町　1995年)
㉚原始古代史部会「度会郡玉城町原六号・同七号発掘略報」『ふびと』第22号　(三重大学学芸学部歴史研究会　1964年)
㉛中世古憲司『銚子口遺跡発掘調査報告』(玉城町教育委員会 1999年)
㉜大西素行・中西正典・中世古憲司・森川常厚『砂谷遺跡発掘調査報告』(玉城町教育委員会　1988年)
㉝前川嘉宏「第一章　考古　第三節　古墳時代」『三重県玉城町史』上巻（玉城町　1995年)
㉞前川嘉宏『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査報告　―第六分冊―　蚊山遺跡左郡地区』(三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター　1993年)
㉟大川勝宏・小坂宜広・江尻健・稲本賢治『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査報告　―第二分冊―　泉貢窯跡・山神城跡』(三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター 1993年)
㊱『三重県の地名』日本歴史地名体系24（平凡社　1983年)
㊲『三重県の地名』日本歴史地名体系24（平凡社　1983年)

Ⅲ 遺　構

1　基本的層位及び地形

今回の調査地は、標高30m前後の蚊野丘陵縁辺部である。調査区は、A・B・Cの3つの調査区によって分割されており、標高の最も低いA地区から標高の最も高いC地区まで比高差が約3m前後ある。基本的な層序は、A地区からC地区までほぼ第1層が表土、第2層が黄褐色粘質土である。全体的に北側に傾斜する斜面であり場所によってはかなりの堆積層が認められる部分がある。遺構検出は、第2層上において行い、弥生時代後期末から近世に至る遺構を検出することができた。

2　検出遺構

遺構は主なものについて記述し、他のものについての詳細は、遺構一覧表（第1表）を参照されたい。

(1) 弥生～古墳時代

ＳＨ６　Ｂ地区の中央部付近において検出した竪穴住居である。遺構のほぼ2/3が調査区外である。東側は、中世以降の溝等によってかなり削平されている。おそらく平面形は正方形とみられる。検出長は、長辺約1.8m、短辺1.45m、深さ0.12mである。炉跡は調査区内において検出することができなかった。床面は、硬化面が認められたがほんの一部分にしか過ぎない。主柱穴は、1ヶ所検出することができた。河原石とみられる丸みを帯びた石が3つ詰められており根石とも考えられるが、住居を廃棄した後に詰められたのかもしれない。壁周溝は、北から西側にかけて幅0.25～0.4m、深さ0.15mである。北西隅の壁周溝上に壺が出土している。出土遺物には、他に高杯がある。遺物は、壁周溝上において出土しており住居廃棄後に捨てられたものとも考えられる。遺物の時期は、欠山様式の中～新段階にかけてのものである。

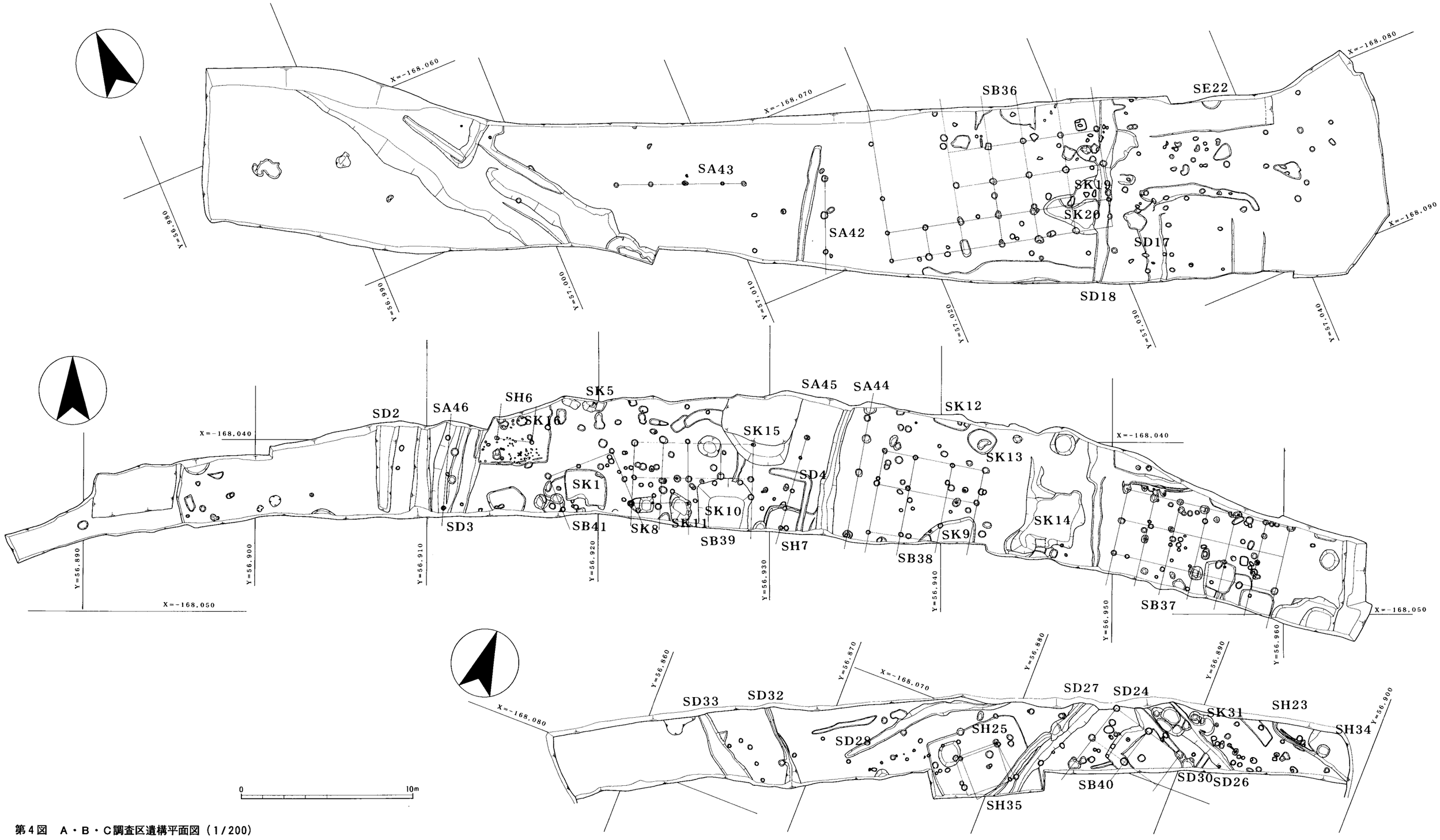
ＳＨ７　Ｂ地区やや中央部からやや西側において検出した竪穴住居である。一部が調査区外である。平面形が正方形とみられ、検出長は、長辺約2.5m、短辺2m、深さ0.09mである。炉跡は、調査区内において検出することができなかった。

主柱穴は、2ヶ所検出することができた。柱穴間は約4mである。遺物は、主柱穴を検出する際において多く出土した。壁周溝は、住居南辺で幅0.3～0.4m、深さ0.05mを測り、部分的に若干残っており、住居内に水が流れ込まないように工夫されていたのであろう。出土遺物には、高杯・甕・壺がある。遺物は、主柱穴上から出土しており住居を廃棄してから捨てられたものであろう。遺物の時期は、欠山様式の中～新段階のものである。

ＳＨ23　Ｃ地区南側において検出した竪穴住居である。竪穴住居のほとんどが調査区外というより現道によって破壊されている。また、別の竪穴住居ＳＨ34と重複している。検出長は、長辺3m、短辺1.5mである。壁周溝は、一部で残っており幅0.15～0.2m、深さ0.17～0.23mである。壁周溝から内側に壁周溝に沿うように溝がみられる。炉跡は、遺構内において確認できなかった。出土遺物には、台付甕・壺蓋・高杯がある。遺物の時期は、欠山様式の中～新段階のものである。

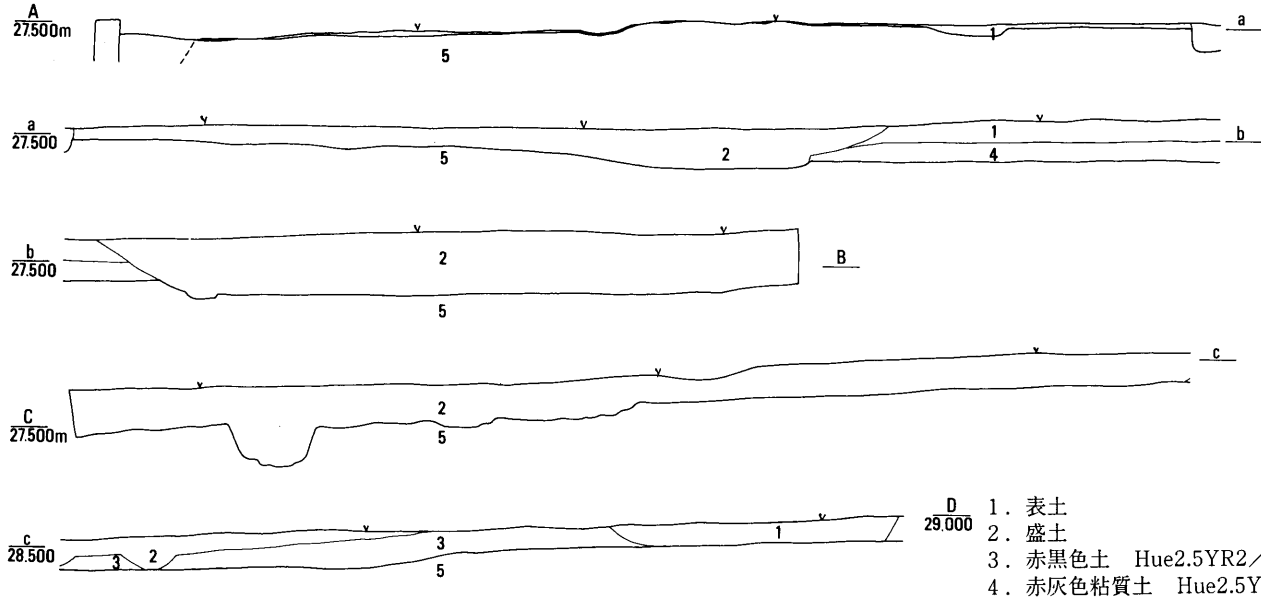
ＳＨ34　現道部分によってほとんど削平されている。検出長は、長辺3.5m、短辺2mである。北東側の壁際において直径約0.7mの円形の土坑が認められる。当竪穴住居かＳＨ23の貯蔵穴の可能性がある。ＳＨ34は、ＳＨ23と比較して新しい。

ＳＨ25　Ｃ地区中央部おいて検出した竪穴住居である。別の竪穴住居ＳＨ35とほぼ同一上に建て直している。平面形は隅丸長方形であり、規模は長辺約5.5m、短辺約4m、深さ0.08mである。炉跡・壁周溝は、調査において確認できなかった。主柱穴は、4ヶ所確認できた。大きいもので直径0.3m、小さいもので直径0.2mで、深さは、0.3～0.4m前後である。主柱穴間は、1.6～2mである。貯蔵穴とみられる土坑が竪穴住居の北東部分に認められる。検出長は、長辺1.1m、短辺1m、深さ0.15mで平面形は、隅丸方形である。遺物は、壺・甕・高杯をはじめ石包丁などが多くまとまって出土している。遺物の時期は、欠山様式の中～新段階にかけてのものである。



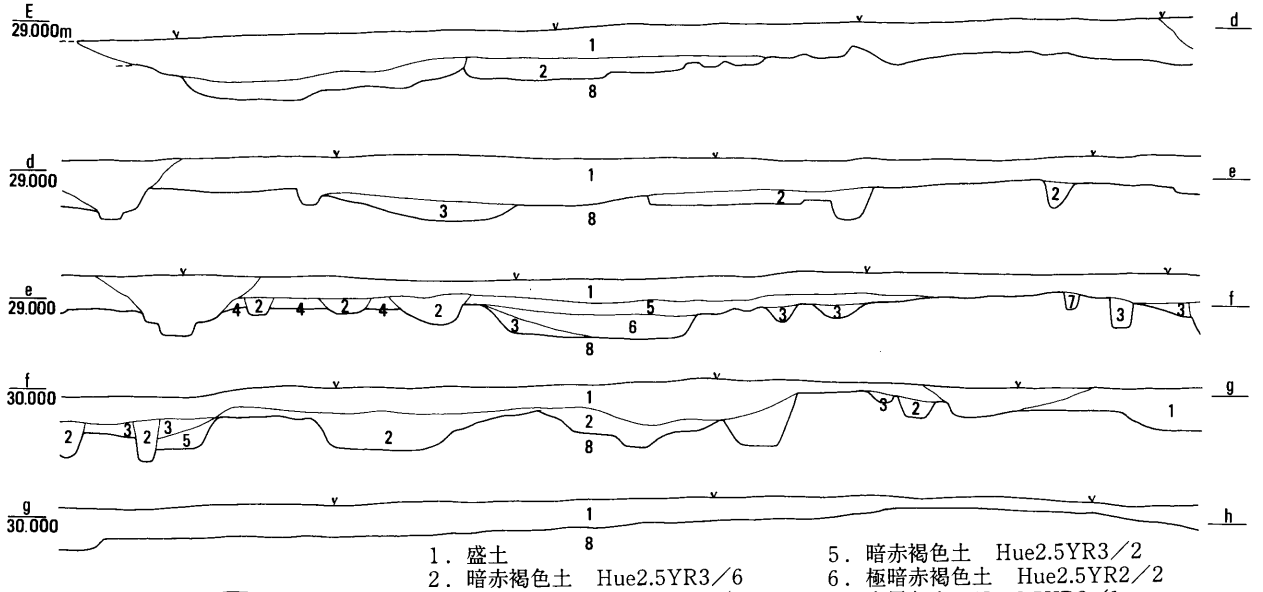
第４図　Ａ・Ｂ・Ｃ調査区遺構平面図（1/200）

A地区



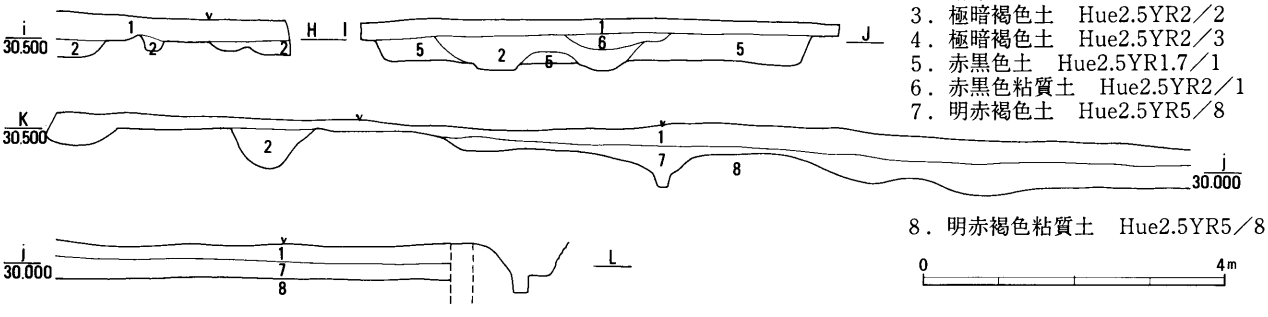
1．表土
2．盛土
3．赤黒色土　Hue2.5YR2／1
4．赤灰色粘質土　Hue2.5YR4／1
5．赤褐色土　Hue2.5YR4／8

B地区



1．盛土
2．暗赤褐色土　Hue2.5YR3／6
3．極赤褐色土　Hue2.5YR3／4
4．赤黒色土　Hue2.5YR1.7／1
5．暗赤褐色土　Hue2.5YR3／2
6．極暗赤褐色土　Hue2.5YR2／2
7．赤黒色土　Hue2.5YR2／1
8．明赤褐色粘質土　Hue2.5YR5／8

C地区



1．表土
2．暗赤灰色土　Hue2.5YR3／1
3．極暗褐色土　Hue2.5YR2／2
4．極暗褐色土　Hue2.5YR2／3
5．赤黒色土　Hue2.5YR1.7／1
6．赤黒色粘質土　Hue2.5YR2／1
7．明赤褐色土　Hue2.5YR5／8
8．明赤褐色粘質土　Hue2.5YR5／8

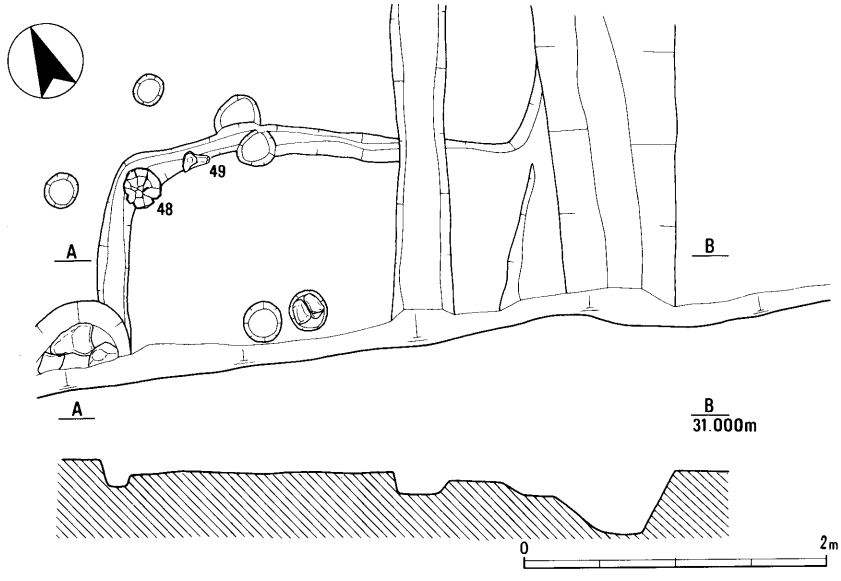
0　4m

第5図　A・B・C調査区土層図（1/100）

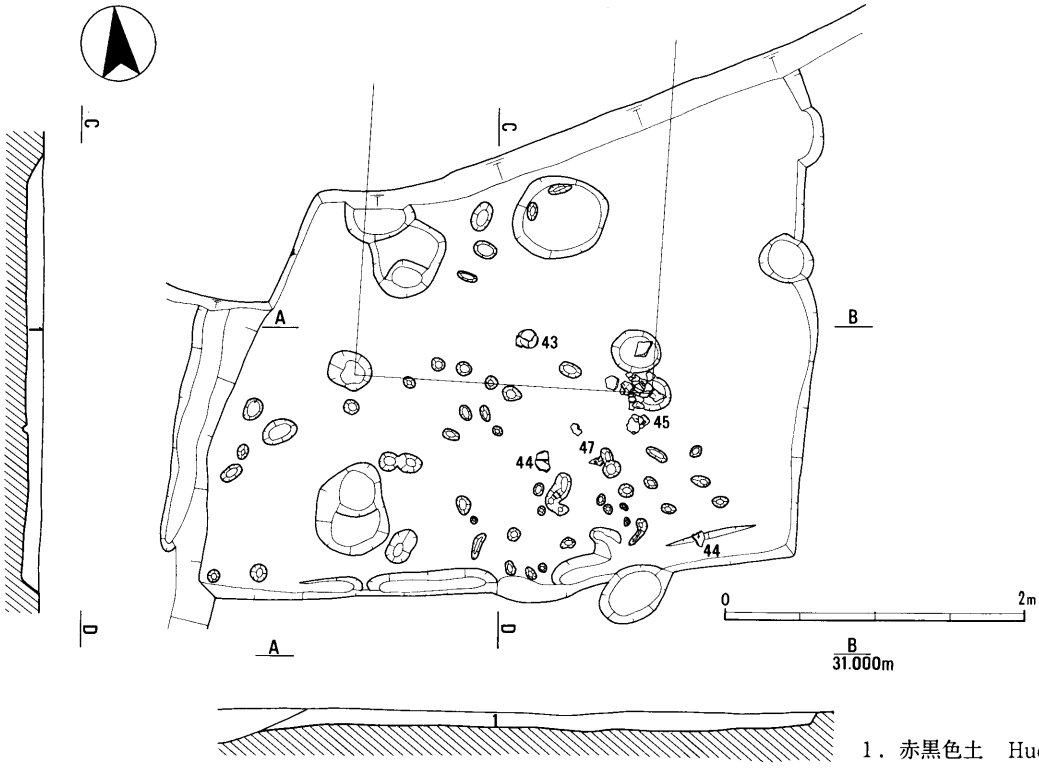
ＳＨ 35　ＳＨ25と完全に重複しており、同規模程度とみられる。主柱穴間は、約1.9m前後である。貯蔵穴は、ＳＨ25としたがこの竪穴住居の可能性も有している。SH25と比較して古いと考えられる。

(2) 鎌倉時代

ＳＢ 37　Ｂ地区中央部から東側において検出した掘立柱建物である。規模は、桁行が21.6m、梁行が3.85m以上を測る。掘立柱建物は、桁行６間・梁行２間以上の東西棟で棟方向の方位は、N13°Ｅである。柱穴は、径0.3～0.5m・深さ0.1～0.5mの円形である。建物柱間寸法は、桁行がそれぞれ西から東へ５尺５寸、４尺５寸、５尺、６尺、６尺、４尺５寸であり、梁行が北から南へ６尺、６尺５寸とみられる。したがって、建物の推定復元規模は、桁行9.55m（31尺５寸）、梁行3.79m以上（12尺５寸以上）となる。柱穴からの遺物は、陶器椀（山茶椀）が出土している。建物の時期は、12世紀後葉～13世紀前葉とみられる。掘立柱建物の東南隅に土坑が



第６図　ＳＨ６平面・断面図（1/50）



1．赤黒色土　Hue2.5YR1.7／1

第７図　ＳＨ７平面・断面図（1/50）

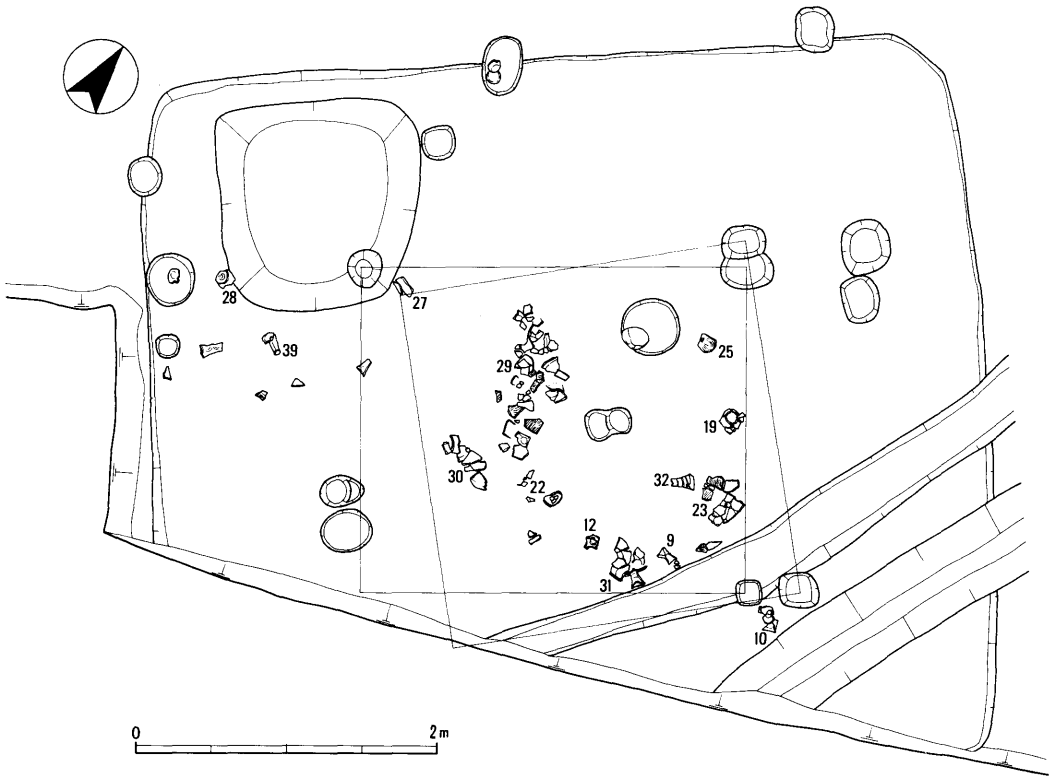
３基検出できたものの遺物は、出土せず時期不明なため東南隅に土坑を有する掘立柱建物と言いきれない。

ＳＢ 40　Ｃ地区中央部付近において検出した掘立柱建物である。掘立柱建物は、桁行２間以上・梁行２間以上の建物である。大半が調査区外であるため建物全体について不明である。建物の方位は、Ｎ15°Ｅである。柱穴は、径0.3～0.7m・深さ0.2～0.3mを測る。柱掘形は、平面形が円形のものから隅丸方形状のものまである。建物規模は、桁行が4.2m以上、梁行が4.5m以上を測る。柱間寸法は、桁行がそれぞれ北から南へ７尺５寸、６尺５寸であり、梁行が西から東へ７尺５寸の等間とみられる。柱穴からの遺物には、土師器小皿・甕・ロクロ土師器皿・椀・陶器椀（山茶椀）が出土した。建物の時期は、12世紀後葉～13世紀前葉とみられる。

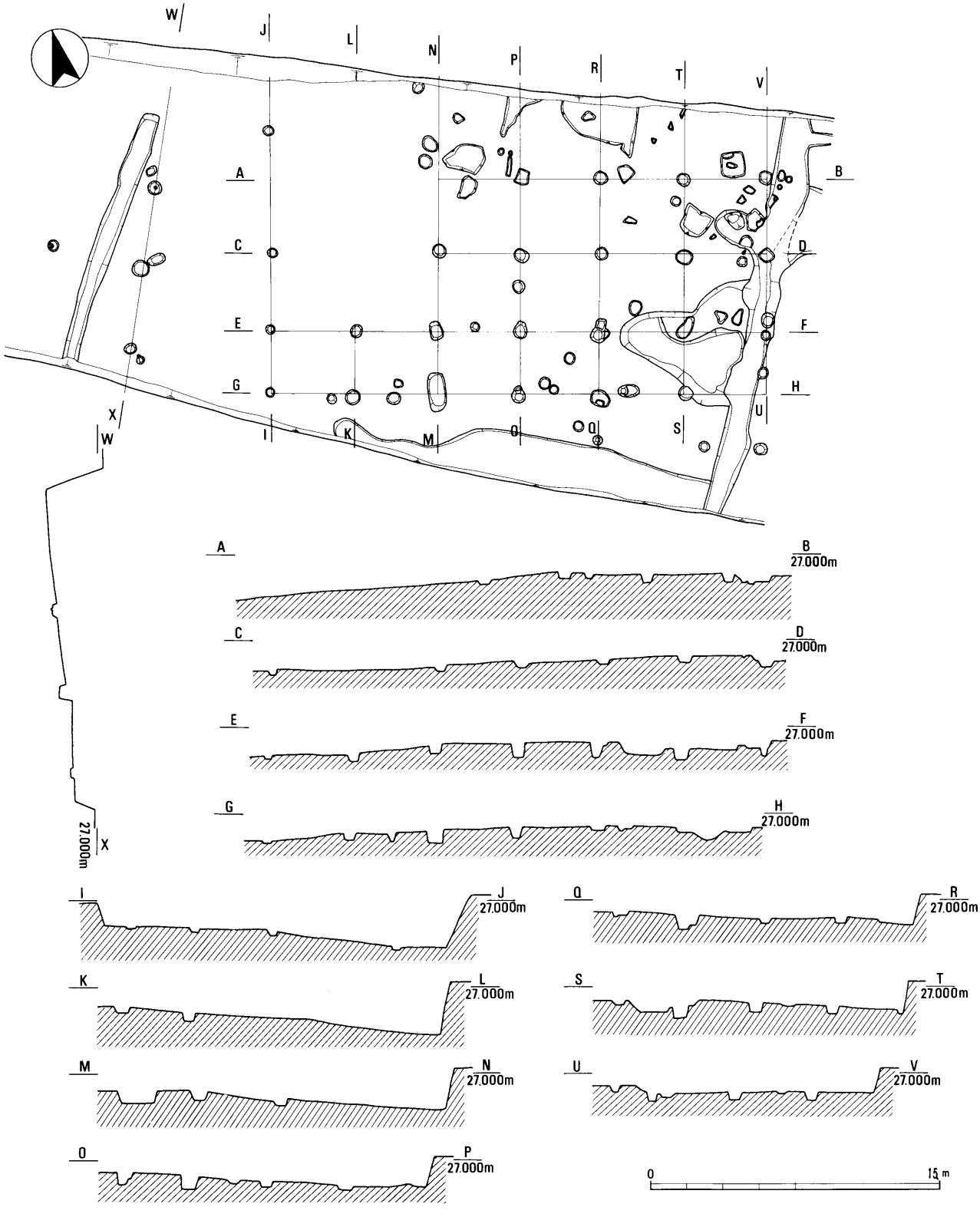
ＳＫ 31　Ｃ地区中央部からやや東側において竪穴住居の間にある土坑である。平面形は、後世の溝によって一部を削平されているが長径1.5m、短径1.2mのほぼ楕円形である。北側において直径0.15m程度の穴が穿がれており土坑に取り付き煙突状である。その周辺部は、熱を受けて黄褐色がやや赤色に変化したあとが僅かにみられる。出土遺物には、甕がある。遺物の時期は12世紀後葉～13世紀前葉である。

(3)　時期不明

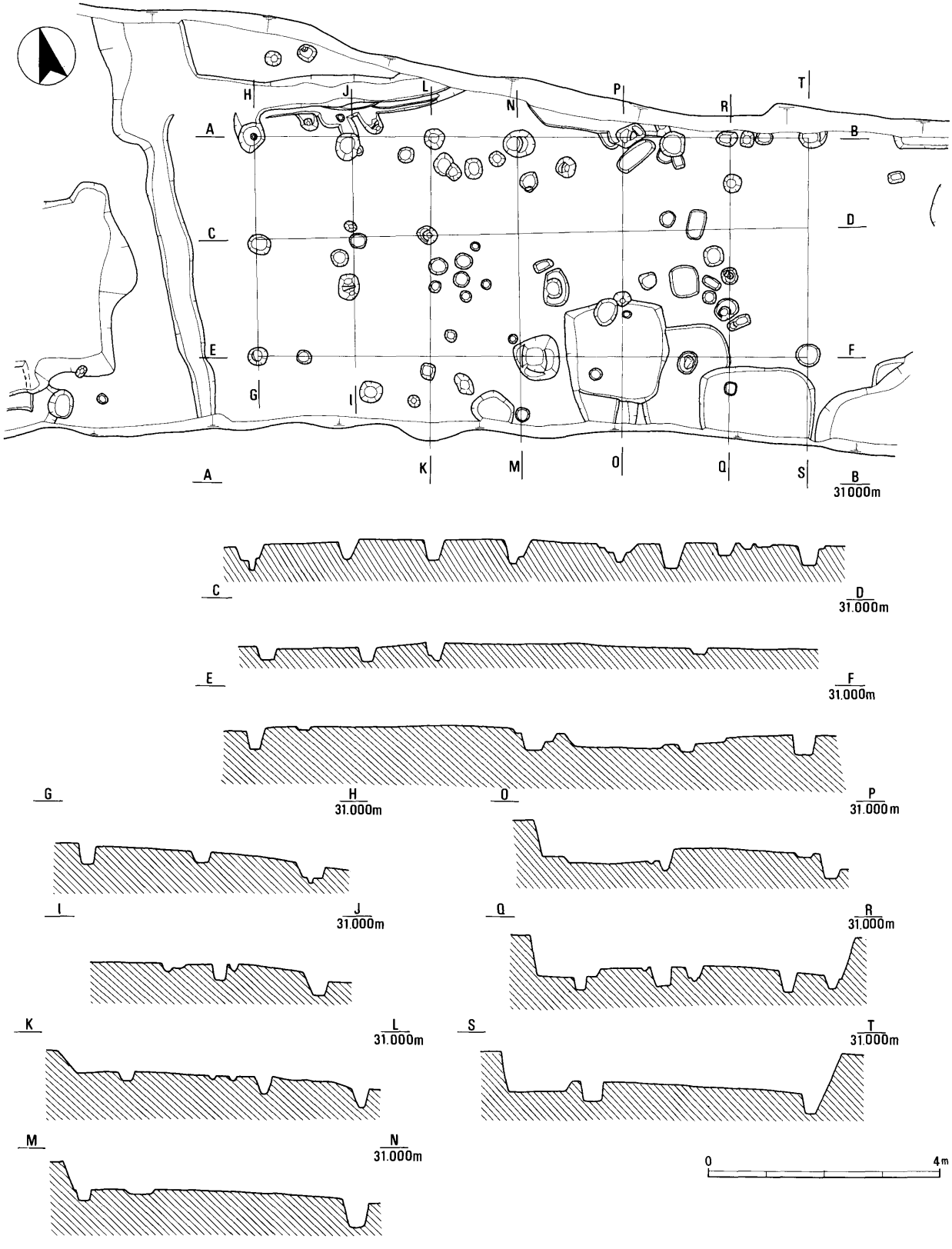
ＳＢ 36　Ａ地区東側において検出した掘立柱建物である。桁行６間、梁行３間以上の東西棟である。建物の棟方向のは、方位は、N14°Eである。柱穴は、径0.15～0.3m・深さ0.1～0.4mの円形である。建物規模は、桁行が8.6ｍ、梁行が3.8ｍ以上を測る。柱間寸法は、桁行がそれぞれ西から東へ５尺、４尺５寸、４尺５寸、４尺５寸、５尺、４尺５寸であり、梁行が南から北へ３尺５寸、４尺５寸、４尺とみられる。したがって、建物の推定復元規模は、桁行8.49m（28尺）、梁行3.64m以上（12尺以上）となる。柱穴からの遺物は出土しなかった。そのため時期を確定するにいたらない。しかし、ＳＢ37・



第８図　ＳＨ 25 平面図（1/50）



第9図　SB36・SA42平面・断面図（1/50）



第10図　SB37平面・断面図（1/100）

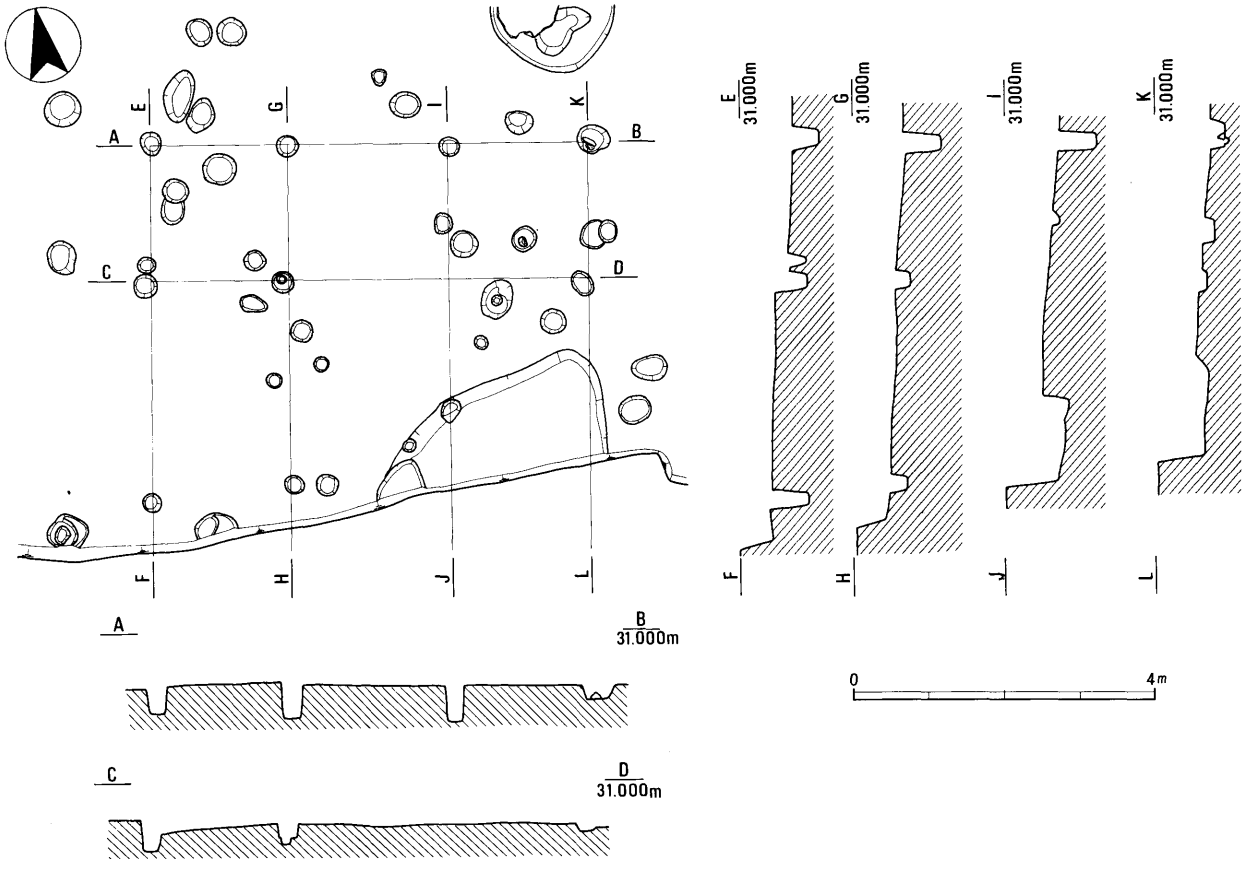
39の建物から推測すると同時期と考えて差し支えなかろう。

東南隅の土坑から遺物が出土しているが近世のものも含まれている。

ＳＢ 38　Ｂ地区中央部から東側において検出した掘立柱建物である。掘立柱建物は、桁行２間以上・梁行３間の南北棟で棟方向の方位は、N11°Ｅである。柱穴は、径0.2～0.4m・深さ0.1～0.5mの円形である。建物規模は、桁行が4.8m以上、梁行が5.8mを測る。柱間寸法は、桁行がそれぞれ北から南へ６尺、10尺であり、梁行が西から東へ６尺、７尺、６尺とみられる。したがって、建物の推定復元規模は、桁行4.85m（16尺以上)、梁行5.76ｍ（19尺）となる。柱穴からの遺物は出土しなかった。そのため時期を確定するにいたらない。東南に土坑があるが近世の遺物が出土している。

ＳＢ 39　Ｂ地区中央部付近において検出した掘立柱建物である。掘立柱建物は、桁行２間以上・梁行２間の南北棟で棟方向の方位は、Ｎ２°Ｅである。柱穴は、径0.2～0.3cm・深さ0.2～0.5mである。建物規模は、桁行が4.3ｍ以上、梁行が6.95mを測る。柱間寸法は、桁行がそれぞれ北から南へ７尺、５尺であり、梁行が西から東へ10尺、12尺とみられる。したがって、建物の推定復元規模は、桁行3.63m（12尺以上)、梁行6.67m（22尺）となる。柱穴からの遺物は出土しなかった。そのため時期を確定するにいたらない。東南部に土坑を有している。遺物は、細片であるが12世紀後葉～13世紀前葉とみられる。

ＳＢ 41　Ｂ地区中央部付近において検出した掘立柱建物である。掘立柱建物は、桁行２間以上・梁行２間の南北棟で棟方向の方位は、N23°Ｗである。柱穴は、径0.1～0.2m・深さ0.2～0.5mである。建物規模は、桁行が3.8ｍ以上、梁行が４ｍを測る。柱間寸法は、桁行がそれぞれ北から南へ７尺、６尺５寸であり、梁行が東から西へ７尺、６尺とみられる。したがって、建物の推定復元規模は、桁行4.1ｍ（13尺５寸)、梁行3.94m（13尺）となる。柱



第11図　ＳＢ37平面・断面図（1/100）

穴からの遺物は出土しなかった。そのため時期を確定するにいたらない。ＳB38と重複するため他の時期の可能性もある。

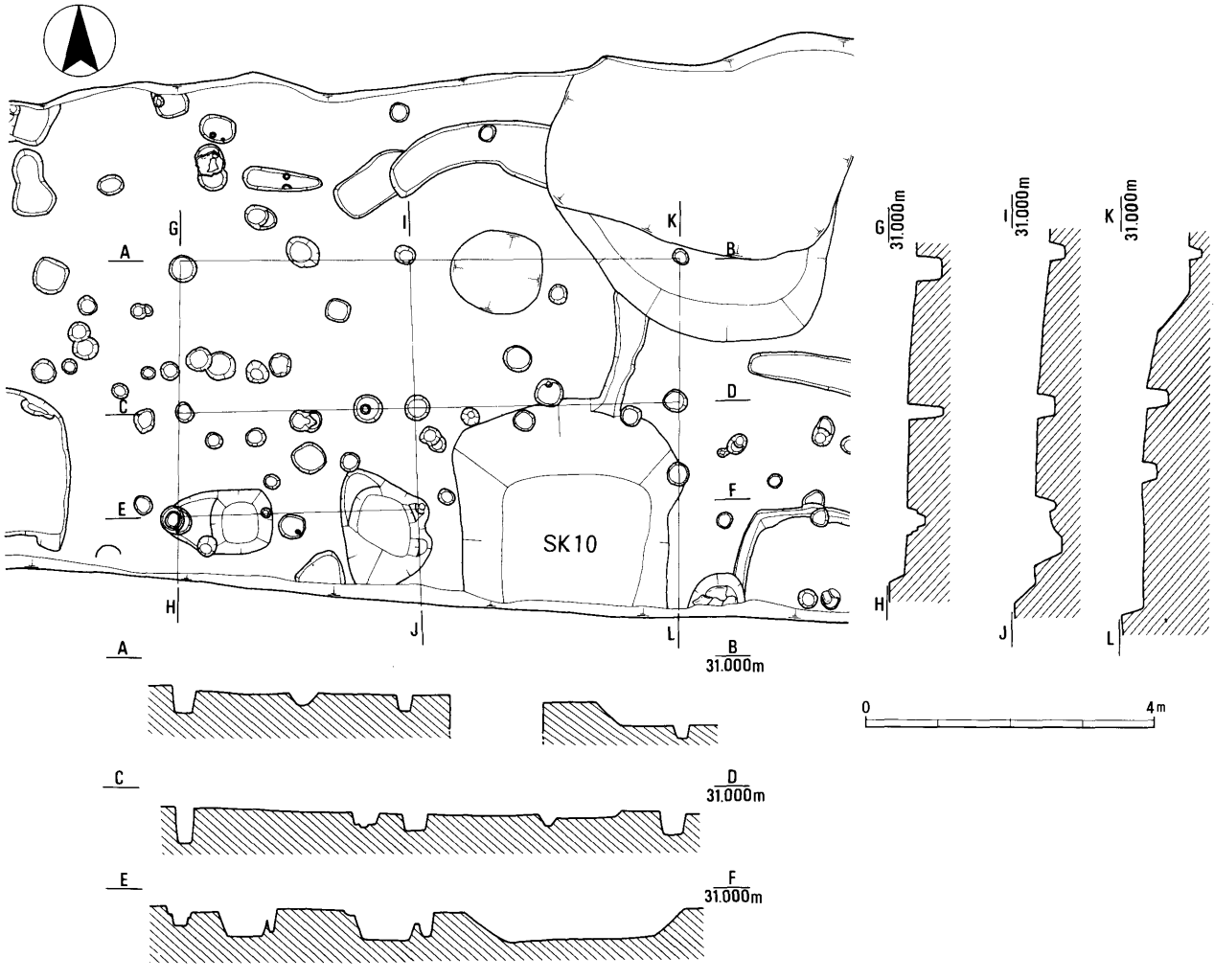
ＳＡ42　Ａ調査区のＳＢ36の西側において検出した南北方向の柵である。検出した柵は2.2m間隔で２間分で柱間寸法は、７尺５寸である。方位はN22°Ｅである。柱穴は、直径0.2～0.3m・深さ0.1～0.2ｍである。

遺物は、柱穴から出土しなかったため時期は、確定できない。また、西側に隣接する溝及び東側にあるＳＢ36との関連性については、建物の方位と合わない為に無関係とも考えられるが、調査区内の自然傾斜を考慮すると関連施設ないし付随施設とも考えられる。

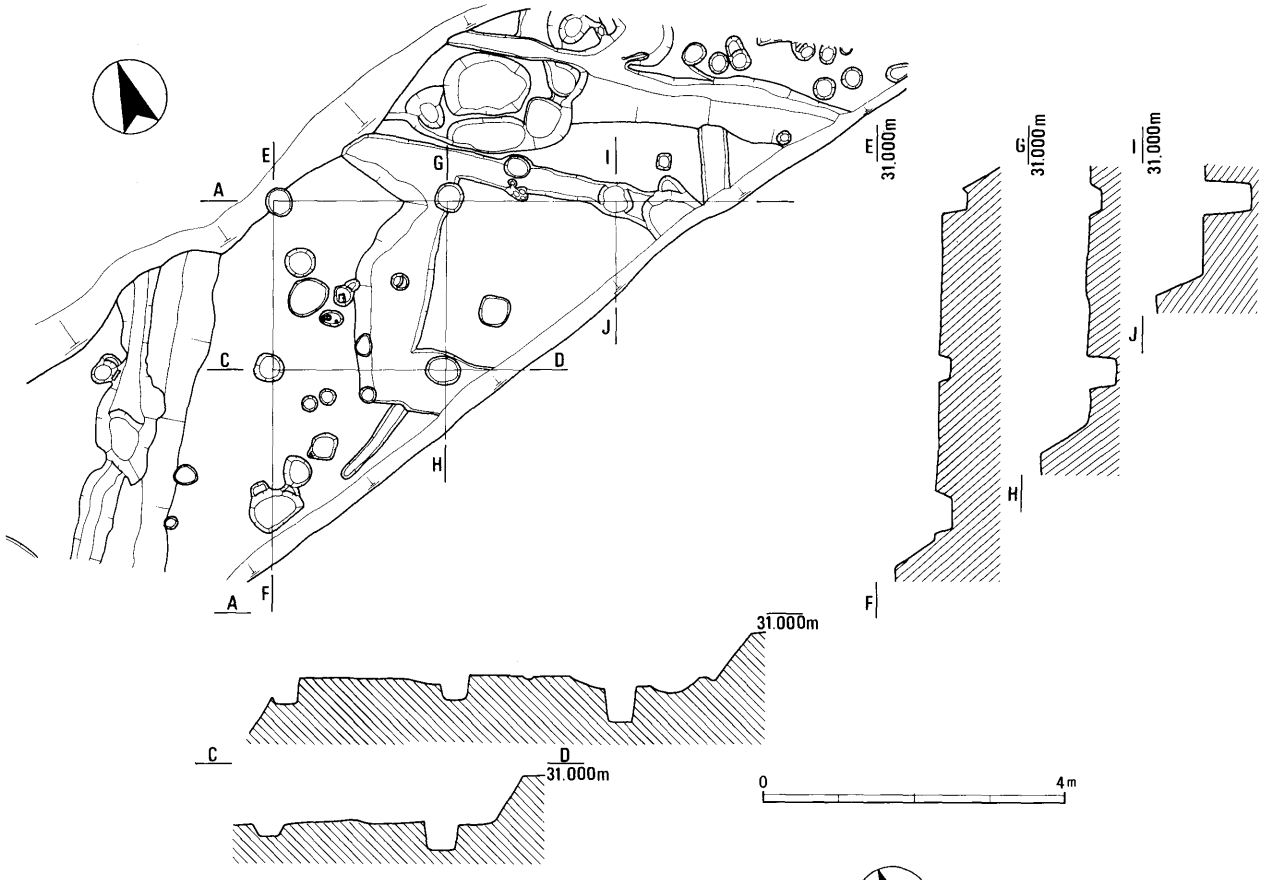
ＳＡ43　Ａ調査区ＳＡ42の西側の溝をはさんで検出した柵である。検出した柵は東西方向で４間分であり、方位はN66°Ｗである。柱穴は、0.2～0.3m・深さ0.1～0.2mである。柱間は東から1.3m・2.2m・2.1m・2.1mで、寸法は、４尺５寸、７尺５寸、７尺、７尺とみられる。遺物は、柱穴から出土しなかったため時期は、確定できない。

ＳＡ44　Ｂ調査区のＳＢ38の西側において検出した南北方向の柵である。検出した柵は３間分であり、方位はN11°Ｅである。柱穴は、0.2～0.3m・深さ0.2～0.4mである。柱間は北から1.8m、２m、3.6mで、柱間寸法は、６尺、６尺５寸、12尺である。しかし、後の12尺は、やや間隔が大きすぎる。おそらく中間部分に柱穴が存在し、６尺間隔であった方が妥当であろう。

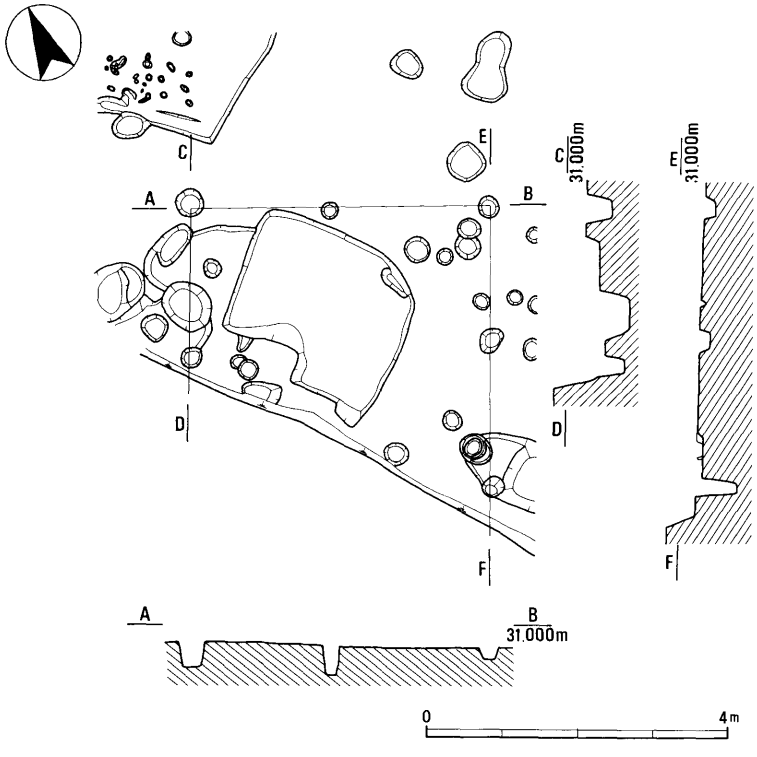
遺物は、柱穴から出土しなかったため時期は、確



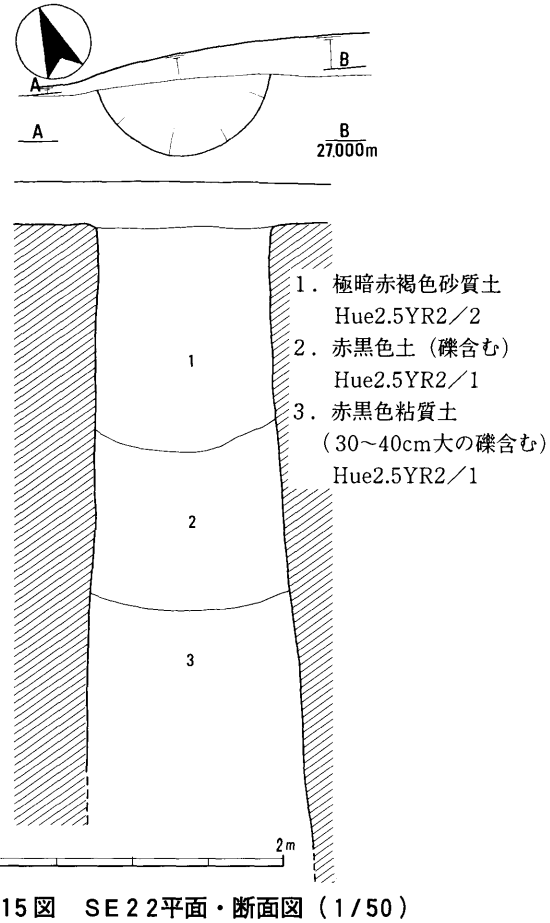
第12図　ＳＢ39平面・断面図（1/100）



第13図　SB40平面・断面図（1/100）

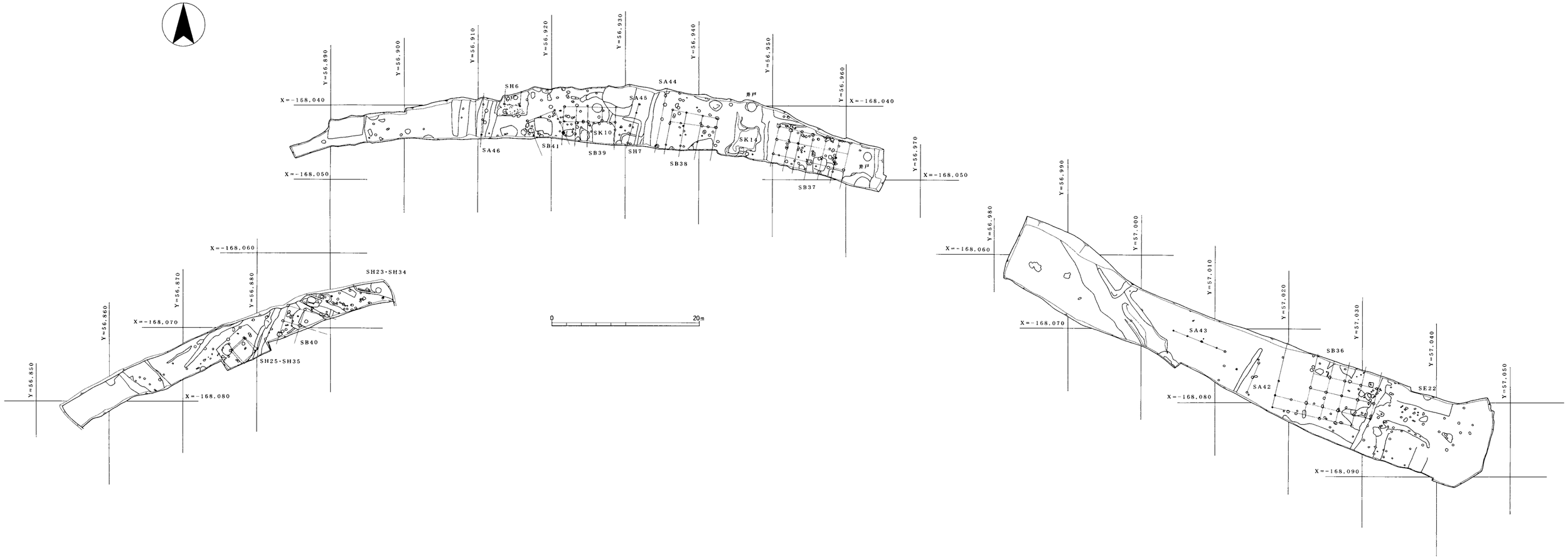


第14図　SB41平面・断面図（1/100）



1．極暗赤褐色砂質土
Hue2.5YR2／2
2．赤黒色土（礫含む）
Hue2.5YR2／1
3．赤黒色粘質土
（30～40cm大の礫含む）
Hue2.5YR2／1

第15図　SE22平面・断面図（1/50）



第16図　調査区略図（1/400）

定できない。しかしながらＳＢ 38との間隔が1.2mの等間であるため、ＳB38と同時期と考えてよかろう。また、隣接する掘立柱建物とを区画する柵と考えられる。

ＳＡ45　Ｂ調査区ＳＡ44の西側の溝を挟んで検出した南北方向の柵である。検出した柵は３間分であり、方位はN17°Ｅである。柱穴は、0.2～0.3m・深さ0.2～0.5mである。柱間は、北から1.3m、２m、2.2ｍである。柱間寸法は、４尺５寸、６尺５寸、７尺である。遺物は、柱穴から出土しなかったため時期は確定できない。ＳA44と同様区画の柵であろう。

ＳＡ 46　Ｂ調査区ＳＨ７の西側の溝内において検出した南北方向の柵である。検出した柵は２間分であり、方位はN5°Ｅである。柱穴は、0.2～0.3m・深さ 0.1～0.2mである。柱間は、北から２ｍ、2.1mであり、寸法は、６尺５寸、７尺である。遺物は、柱穴から出土しなかったため時期は、確定できない。

ＳB39・ＳA45と一連の施設である可能性があり、これらの施設で一区画をなしていたとみられる。

ＳＥ22　Ａ地区東側北壁付近において検出した井戸である。遺構のほぼ半分は、調査区外である。検出長は、径1.2m前後を測る。深さは、重機によって掘削したものの井戸底に至ることができなかった。掘削した範囲内では、深さ4.5mを測る。埋土は、第一層が暗褐色土、第二層が赤黒色土、第三層が赤黒色粘質土で円礫を多く含む。第三層において礫が多く含まれるようになってきており、底近くかもしれない。調査区内に最近まで使用されていた井戸も存在するため、現代のものとも考えられるが中世の掘立柱建物がそばに存在することを考えれば中世に掘削されたものであろうか。

（萩原義彦）

遺構番号	地区名	時　期	規　　模　(m)			備　　考
			長	短	深　さ	
SK1	E8	時期不明	3.50	2.00	0.50	
SD2	E6	中世	4.45	0.60	0.20	
SD3	E7	近世	5.40	2.20	0.26	
SD4	F11	近世	5.00	0.30	0.14	
SK5	F8	中世	1.00	0.50	0.40	
SH6	E7	弥生～古墳	2.50	2.00	0.09	
SH7	F11	弥生～古墳	1.80	1.45	0.12	
SK8	E9	時期不明	1.00	0.90	0.38	
SK9	G13	近世	2.20	1.10	0.15	
SK10	F10	中世	2.50	2.50	0.43	
SK11	F10	時期不明	1.40	1.00	0.35	
SK12	H13	弥生？	1.80	0.35	0.19	
SK13	H13	中世	1.40	1.25	0.18	
SK14	H15	近世	3.50	2.70	0.29	
SK15	G10					ＳＫ 10 に含まれる
SK16	F7	現代	0.40	0.40	0.23	
SD17	G38	近世	10.00	0.60	0.10	
SD18	H38	近世	10.50	0.50	0.11	
SK19	H38	中世	1.10	0.80	0.07	
SK20	G38	近世	2.10	0.95	0.16	
SK21	G37	近世	6.00	0.80	0.28	
SE22	I 39	時期不明	1.40	1.40	4.50	
SH23	Z4	弥生～古墳	4.50	0.80	0.43	
SD24	Y3	中世	4.20	0.30	0.10	
SH25	W1	弥生～古墳	5.50	4.00	0.08	
SD26	Y3	中世	0.90	0.24	0.06	
SD27	X1	近世	4.00	0.25	0.39	
SD28	W100	中世	6.50	0.45	0.28	
SK29	X2	時期不明	3.20	0.80	0.05	
SD30	Y3	中世	0.85	0.34	0.06	
SK31	Y3	中世	2.00	1.30	0.43	
SD32	U99	近世	4.80	0.20	0.18	
SD33	T98	近世	4.30	1.20	0.12	
SH34		弥生～古墳				ＳＨ 23 と重複
SH35		弥生～古墳				ＳＨ 25 と重複
SB36		中世？	6 間×３間以上			
SB37		中世	6 間×２間以上			
SB38		中世？	３間×３間以上			
SB39		中世？	４間×３間以上			
SB40		中世	３間×２間以上			
SB41		古墳？	２間×２間以上			
SA42		中世？	２間			
SA43		中世？	４間			
SA44		中世？	４間			
SA45		中世？	３間			
SA46		中世？	２間			

第１表　遺構一覧表

Ⅳ　遺物

今回の調査によって出土した遺物は、コンテナバットにして約20箱である。A地区からの遺物量は、非常に少なく、B・C地区からのものが主である。特に竪穴住居から出土したものがかなりの割合を占めている。遺物は、主に土器で一部に石製品及び銭貨が含まれている。特に土器類は、丘陵部ということもあって全体的に風化著しく、器表面の劣化が激しく不明な部分が多い。

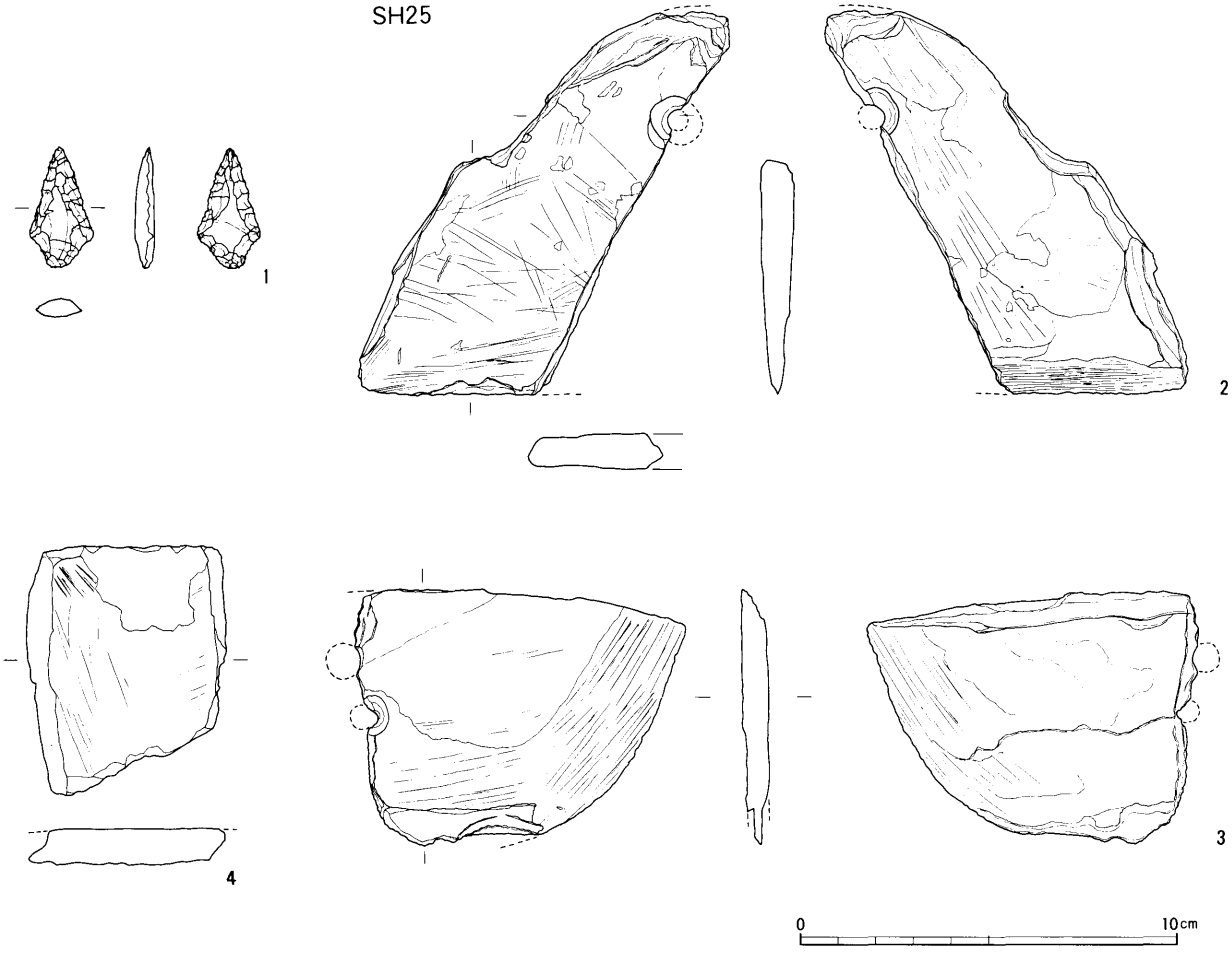
また、遺物の時期は、おおまかにみて弥生～古墳時代・鎌倉時代のものを中心に、江戸時代に至るものがある。弥生～古墳時代は、欠山様式中～新段階、鎌倉時代は、12世紀中葉～12世紀後葉が主である。

遺物は、主なものを中心に記述し、個々の詳細については、観察表を参照されたい。

1　弥生～古墳時代

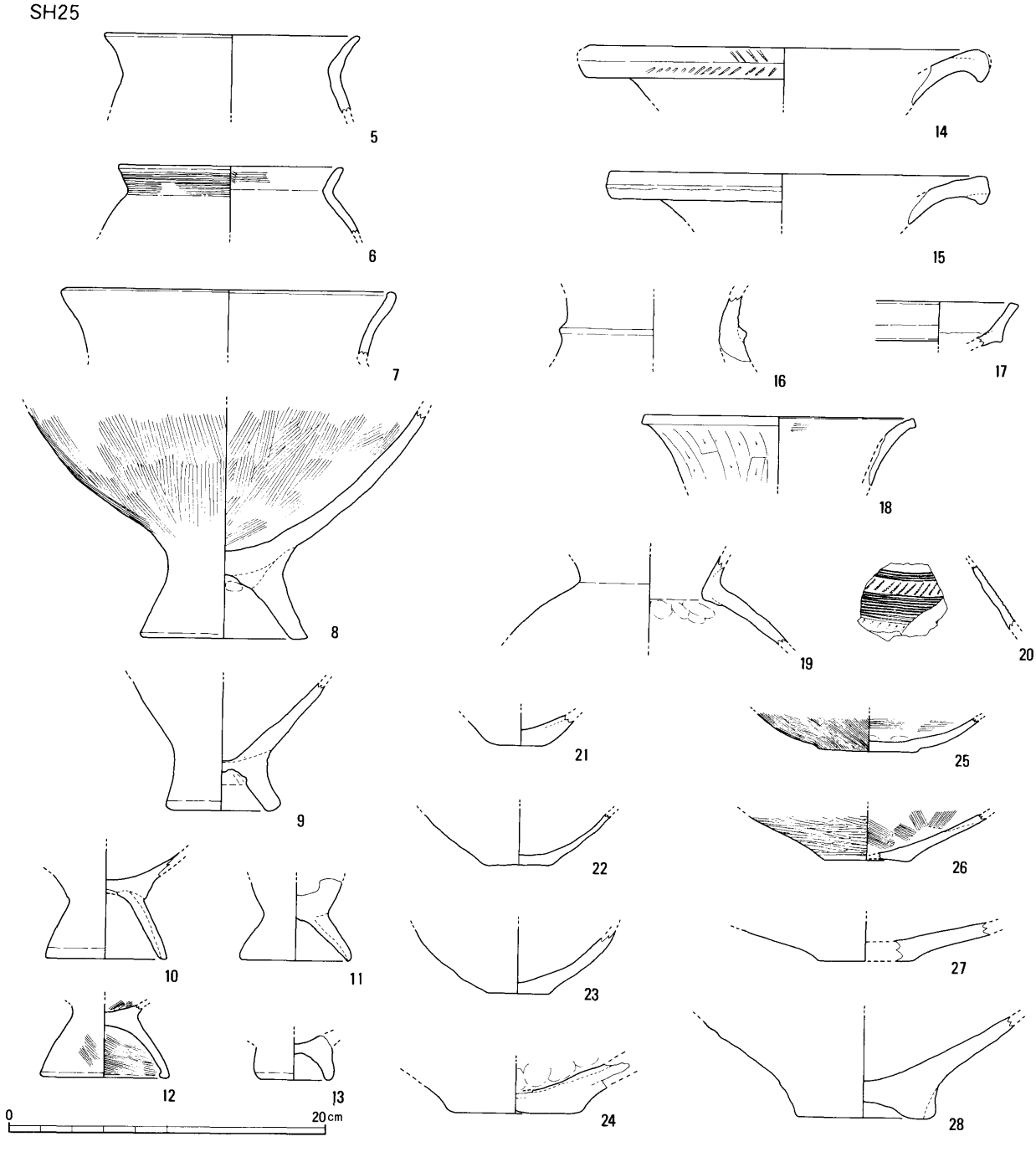
1は、凸基有茎式石鏃である。凸基部分がやや内彎気味で、茎部を作り出している。茎部はやや短い。全体的に角稜部分が欠けて明瞭でない。中世以降の溝からの出土であるためとみられる。

ＳＨ25出土遺物（2～42）　出土遺物には、壺・台付甕・高杯・磨製石包丁・同未製品がある。石包丁の素材は、緑泥片岩である。2は大型石包丁で、割れて部分的にしか残っていない。おそらく直線刃半月型態とみられる。刃部は、体部との境の稜線がやや不明瞭であるが片刃状である。紐孔は、両面穿孔である。使用による磨耗とみられる光沢を有している。[1] 3は、背部が直線的で刃部が外彎する石包丁で、外彎刃半月型態であろう。体部と刃部の境は、明瞭



第17図　出土遺物実測図

でなく、刃部の欠損しているため両刃であろうか。紐孔は、2ヶ所認められるが2ヶ所共に両面穿孔である。一ケ所は、補修孔とみられる。全体的に使用による磨耗とみられる光沢を有している。4は、同未製品であろうか。ただ、一面が非常に滑らかであり砥石という可能性も否定できない。5・6は、甕の口辺部である。7は、口辺部においてやや外方に湾曲し、口縁端部が僅かながら内面側に尖り気味である。8～13は、台付甕である。全体的に台部は、厚ぼったい。台部接地部分は、内面に折り返されているものもある。14・15は、広口壺で口縁部において垂下し、中央部分がトップになるように成形されている。14では、端部に刺突文が施される。16は、頸部において突帯が貼り付けられている。口縁端部や体部にかけてはない。17は、受口状の口縁部を持つものであろう。18は、口辺部付近をケズリ



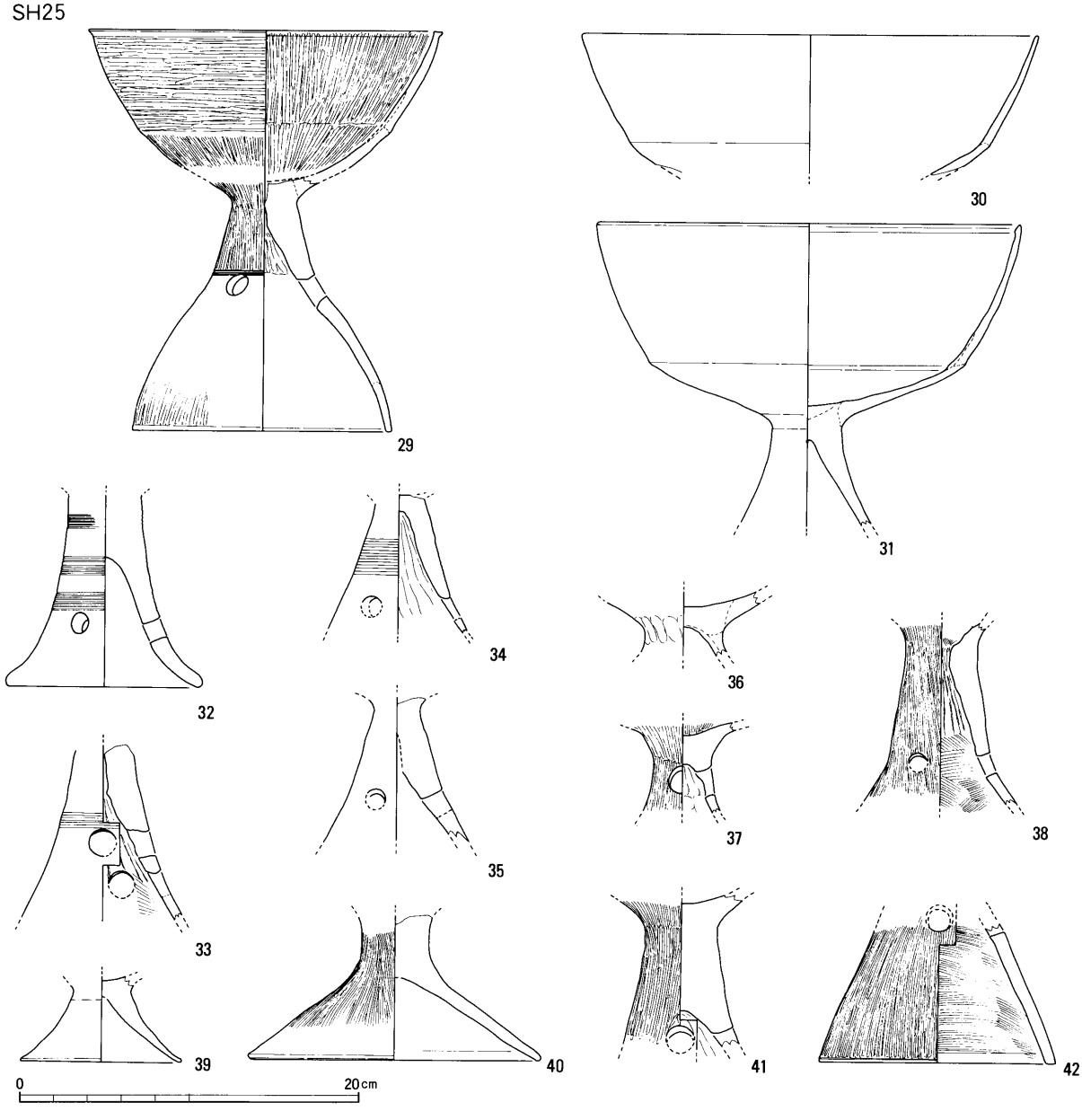
第18図　出土遺物実測図

によって調整している。20は、壺体部であろう。3条の櫛描横線文・刺突文・10条の櫛描横線文・刺突文が施される。21～28は、壺底部である。風化著しく調整不明なものもあるがミガキ・ハケによって調整されているものもある。29～42は、高杯である。29は、杯部外面で横方向のミガキである。口縁端部は、上方に面を持つようにナデによって、外方につまみだされた様に調整される。[2]遺物の時期は、他のＳＨと同様に欠山様式中～新段階とみられる。[3]

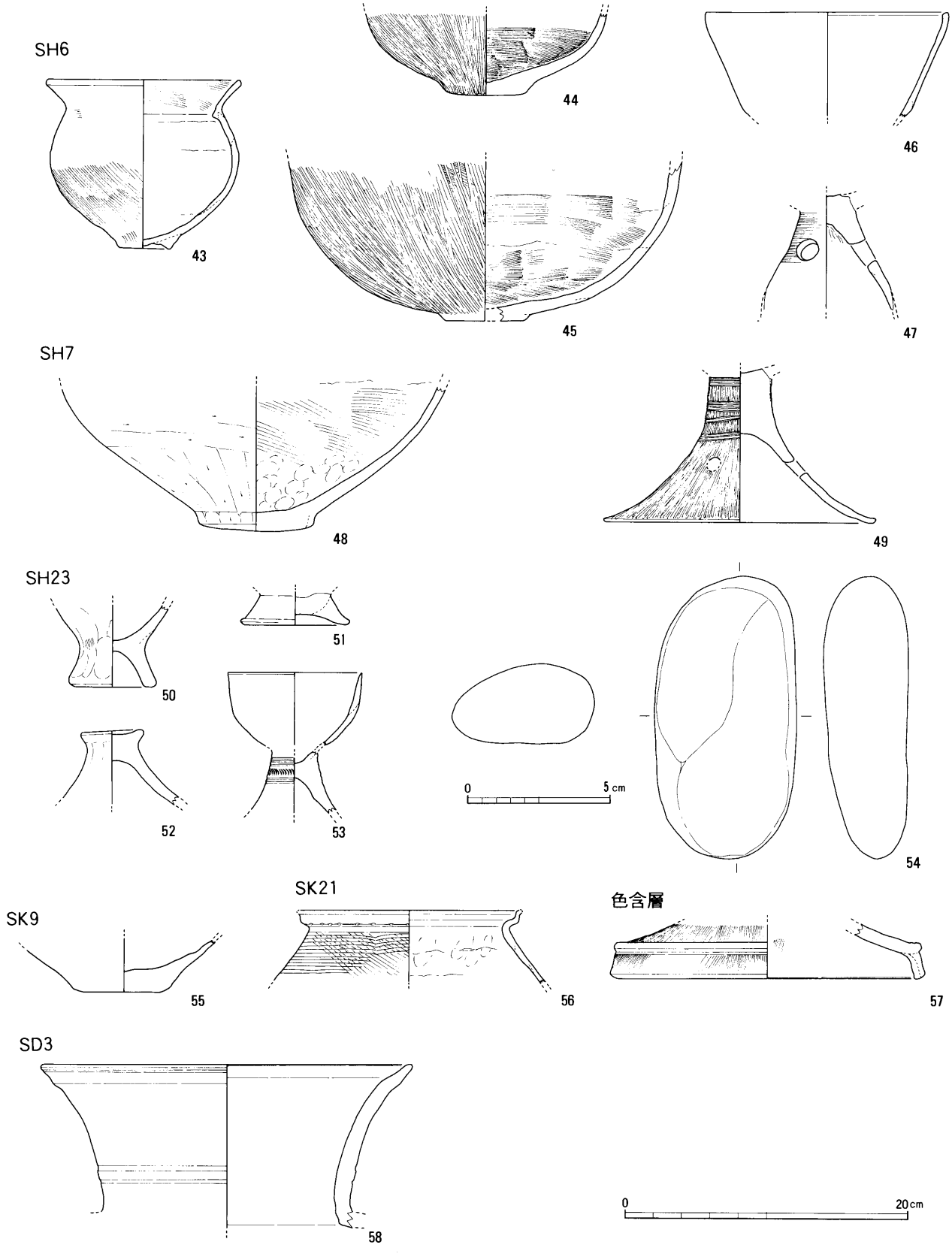
ＳＨ６出土遺物（43～47）　出土遺物には、弥生土器甕・壺・高杯がある。43は、体部がやや粗いハケによって調整されている。44・45は、共に外面をミガキで、内面をハケによって細かく調整される。46・47は、同一個体であろうか。杯部は、内外面がミガキであろう。脚部は、透孔が3方向である。透孔から上部において櫛描横線文が施される。遺物の時期は、欠山様式中～新段階にかけてのものである。

ＳＨ７出土遺物（48・49）　出土遺物には、弥生土器壺・高杯がある。48は、体部外面下半は、縦方向から横方向のケズリ。49は、透孔より上方に櫛描横線文が上から４・４・２・４条で施される。ミガキによって調整し精緻に仕上げる。遺物の時期は、ＳＨ６と同様に欠山様式中～新段階とみられる。

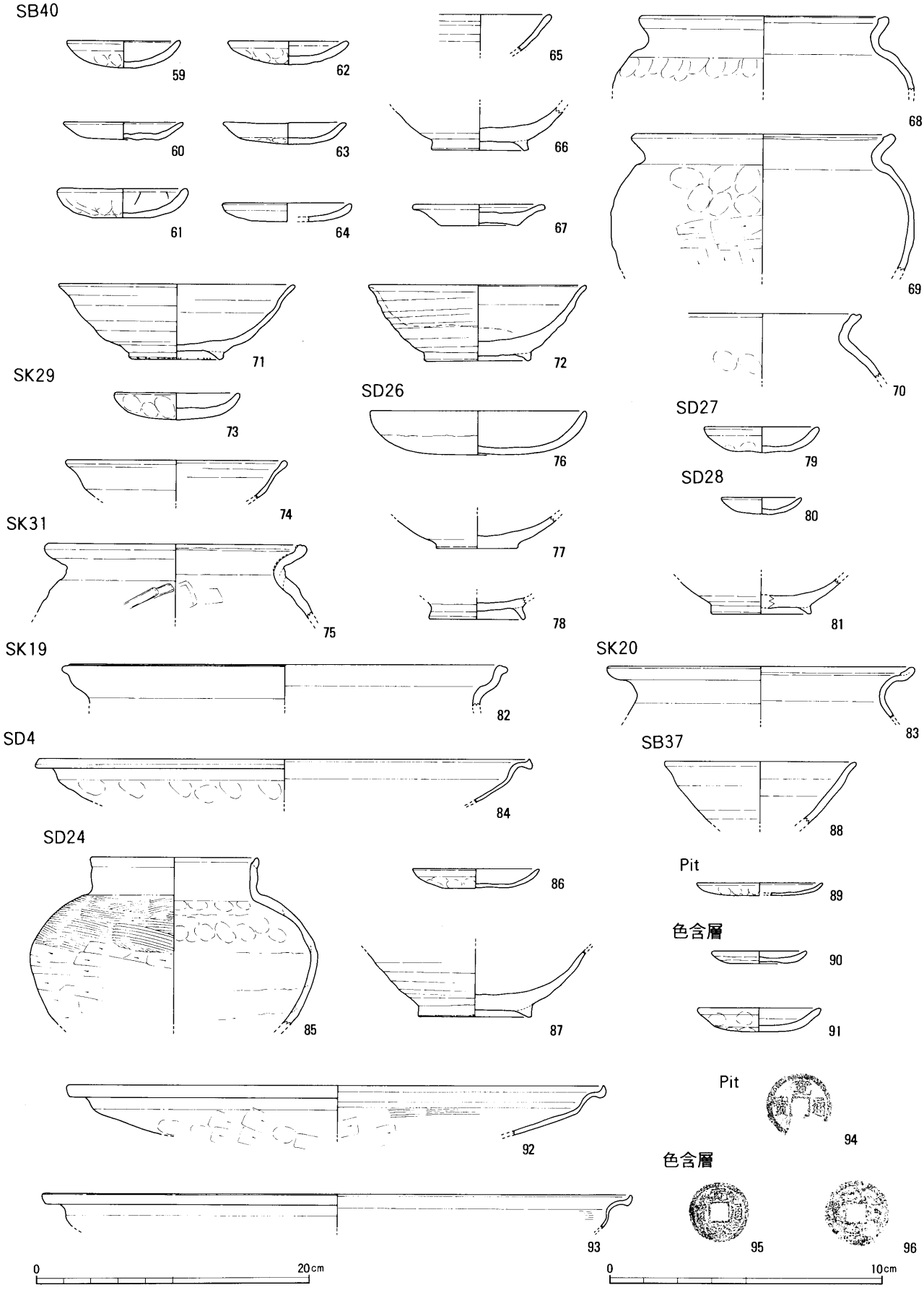
ＳＨ23出土遺物（50～54）　出土遺物には、台付



第19図　出土遺物実測図



第20図　出土遺物実測図



第21図　出土遺物実測図

甕底部・壺蓋・高杯・鉢底部?・叩石がある。53は、杯部がやや直線的に立ちあがる口縁部に口縁端部が尖り気味で、やや短めとみられる脚部を有する。脚部には、櫛描横線文が3・3条、その間に刺突文が施される。遺物の時期は、SH6・7と同様に欠山様式中～新段階とみられる。

SK 9 出土遺物（55）　出土遺物には、甕底部がある。遺物の時期は、欠山様式中～新段階であろう。

SK 21 出土遺物（56）　出土遺物には、S字状口縁台付甕がある。口縁部のキザミは風化著しく判別しづらい。頸部から体部にかけてやや粗いヨコハケがほどこされる。時期は、欠山様式新段階とみられる。

包含層出土遺物（57）　出土遺物には、高杯がある。脚部接地部分とみられる。接地部分に透孔とみられる個所が残る。表面は、ハケによって調整され精緻である。同様なものと考えられるものに阿形遺跡出土がある。④時期は、欠山様式中～新段階とみられる。

2　奈良時代

SD 3 出土遺物（58）　出土遺物には、須恵器甕がある。遺物の時期は、8世紀中葉～後葉にかけてのものであろう。

3　鎌倉～室町時代

SB 40 出土遺物（59～72）　出土遺物には、土師器小皿・土師器甕・ロクロ土師器椀・皿・陶器椀（山茶椀、本文以下山茶椀と記載する）がある。⑤68～70は、土師器甕である。口縁端部は、内側に少し折り込まれる。59～64は、土師器小皿である。底部から緩やかに立ちあがる、全体的に器壁は、厚い。65・66はロクロ土師器椀である。65は、口辺部であるが風化著しく調整など不明瞭である。66は、底部で高台が貼り付けられる。高台の断面形は、ほぼ台形状である。67は、底部がやや凹み糸切りの痕跡をとどめる。71・72は、藤澤編年の尾張第4型式⑥とみられる。共に内面が研磨されたように滑らかである。遺物の時期は、12世紀中～後葉にかけてのものである。

SB 37 出土遺物（88）　出土遺物には、山茶椀がある。底部は欠損してないが、遺物の時期は藤澤編年の渥美第4型式とみられる。

SK 29 出土遺物（73～74）　出土遺物には、土師器小皿・ロクロ土師器椀がある。73は、やや厚みのある小皿である。遺物の時期は、12世紀中～後葉にかけてである。

SK 31 出土遺物（75）　出土遺物には、土師器甕がある。口縁部は、僅かながら折り込まれている。遺物の時期は、12世紀中～後葉にかけてのものである。

SD 26 出土遺物（76～78）　出土遺物には、土師器杯・ロクロ土師器椀・皿の底部である。77は、高台なしのもので底部に糸切り痕跡をとどめる。遺物の時期は、12世紀中～後葉にかけてのものである。

SD 27 出土遺物（79）　出土遺物には、土師器小皿がある。遺物の時期は、12世紀中～後葉にかけてのものである。

SD 28 出土遺物（80～81）　出土遺物には、土師器小皿・山茶椀がある。81は、尾張第4型式とみられる。底部には、糸切り痕跡をとどめる。遺物の時期は、12世紀中～後葉にかけてのものである。

SK 19 出土遺物（82）　出土遺物には、土師器鍋がある。口縁部付近は、かなり風化が著しく若干判別しづらいが、遺物の時期は、13世紀後葉～14世紀前葉にかけてのものであろう。

SK 20 出土遺物（83）　出土遺物には、土師器鍋がある。遺物の時期は、13世紀後葉～14世紀前葉にかけてのものであろう。

SD 4 出土遺物（84）　出土遺物には、土師器鍋がある。遺物の時期は、15世紀後葉～16世紀前葉にかけてのものであろう。

SD 24 出土遺物（85～87）　出土遺物には、土師器小皿・茶釜・山茶椀がある。85・86は、13世紀後半～14世紀初頭にかけてのものであろう。山茶椀の時期は、尾張第4型式である。

Pit 出土遺物（89）　出土遺物には、土師器小皿がある。89は、他の小皿と比較して扁平で、遺物の時期は13世紀中～後葉ものであろう。

包含層出土遺物（90～93）　出土遺物には、土師器小皿・鍋がある。鍋は口縁部の断面形が三角形である。遺物の時期は、土師器小皿は12世紀中～後葉、土師器鍋は14世紀後葉～15世紀前葉にかけてのも

番号	実測番号	出土遺構	器種	計測値			調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
				口径cm	器高cm	その他cm						
1	020-01	V100 SD28	石鏃	長さ 3.2	幅 1.7	厚さ 0.5	表面風化著しい	－	－	－	－	讃岐岩・重さ2.6g
2	020-02	W1 SH25	石包丁	残長 10.45	残幅 9.7	残厚 1	表面に使用とみられる光沢あり	－	－	－	－	結晶片岩(緑泥片岩)
3	021-01	W1 SH25	石包丁	残長 8.25	残幅 6.8	残厚 0.75	表面に使用とみられる光沢あり	－	－	－	－	結晶片岩(緑泥片岩)
4	022-01	W1 SH25	未製品	残長 6.6	残幅 5.3	残厚 1	一面が磨かれている	－	－	－	－	結晶片岩(緑泥片岩)、砥石の可能性も有り
5	011-04	V1 SH25	甕	16	－	－	表面風化著しく調整不明	やや粗	並	内:にぶい黄橙色(Hue10YR6／5) 外:にぶい黄橙色(Hue10YR6／5)	口縁部 1／5残	
6	011-03	V1 SH25	甕	14.1	－	－	内：ナデ・ハケ・ヨコナデ 外：ヨコナデ・ハケ	やや粗	並	内:にぶい黄橙色(Hue10YR7／2) 外:浅黄橙色(Hue10YR8／3)	口縁部 1／5残	
7	011-02	W1 SH25	甕	21	－	－	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	やや粗(～2.5㎜の砂粒含む)	並	内:にぶい褐色(Hue7.5YR5／3) 褐灰色(Hue7.5YR4／1) 外:にぶい褐色(Hue7.5YR7／4)	口縁部 1／5残	
8	016-01	W1 SH25	台付甕	－	－	底径 10.5	内：ハケ・ヨコナデ・ケズリ・オサエ 外：ヨコナデ・ハケ	粗(～3.5㎜の小石、砂多い)	並	明黄褐色(Hue10YR6／6)	体部下半 約1／2残	
9	014-04	W1 SH25	台付甕	－	－	底径 6.3	内：ナデ 外：ナデ	粗(～2.5㎜の砂粒含む)	並	明赤褐色(Hue5YR5／6) 明黄褐色(Hue10YR7／6)	底部完存	19
10	014-05	W1 SH25	台付甕	－	－	底径 7.6	内：工具ナデ 外：ナデ	やや粗(～1.5㎜の砂粒含む)	並	灰白色(Hue10YR8／3) にぶい黄褐色(Hue10YR5／3)	底部 約1／3残	22
11	013-04	W1 SH25	台付甕	－	－	台径 7	表面風化著しく調整不明	やや粗	並	内:橙色(Hue7.5YR7／6) 外:橙色(Hue7.5YR7／6)	台部 2／3残	歪み大
12	015-04	W1 SH25	台付甕	－	－	底径 7.8	内：ハケ 外：ハケ	粗(～1.7㎜の砂粒を含む)	並	明赤褐色(Hue2.5YR5／6)	台部完存	21
13	015-07	W1 SH25	台付甕	－	－	－	表面風化著しく調整不明	粗(～2.2㎜の砂粒を含む)	並	明黄褐色(Hue10YR6／6)	台部完存	
14	016-02	W1 SH25	壺	26	－	－	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	粗(～2.5㎜の砂多い)	並	橙色(Hue7.5YR6／6)	口縁部 1／7残	
15	011-06	W1 SH25	壺	26.2	－	－	表面風化著しく調整不明	やや粗	並	内:橙色(Hue7.5YR6／6) 外:橙色(Hue7.5YR6／6)	口縁部 1／10残	
16	015-01	W1 SH25	壺	12.1	－	－	内：ナデ 外：ナデ	粗(～2.7㎜の砂粒を含む)	並	橙色(Hue7.5YR6／6)	頸部 約1／2残	
17	011-07	V1 SH25	壺	－	－	－	表面風化著しく調整不明	やや密	並	内:橙色(Hue7.5YR6／6) 外:橙色(Hue7.5YR6／6)	残少量	
18	011-05	W1 SH25	壺	17.3	－	－	内：ヨコナデ 外：ケズリ	やや密	並	内:にぶい黄橙色(Hue10YR6／4) 外:にぶい黄橙色(Hue10YR6／4)	口縁部 1／7残	
19	011-01	W1 SH25	壺	－	－	－	内：ナデ・オサエ 外：風化著しく調整不明	やや密	並	内:灰褐色(Hue7.5YR5／2) 外:橙色(Hue7.5YR7／6)	残少量	15
20	013-05	W1 SH25	壺	－	－	－	内：ナデ 外：表面風化著しく調整不明	やや密	並	内:明赤褐色(Hue2.5YR5／6) 外:明赤褐色(Hue2.5YR5／6)	残少量	描横線文・刺突文を交互に施
21	013-03	W1 SH25	甕	－	－	－	表面風化著しく調整不明	やや密	並	内:にぶい黄橙色(Hue10YR7／4) 外:にぶい黄橙色(Hue10YR7／4)	底部残少量	
22	018-05	W1 SH25	壺	－	－	底径 4.7	表面風化著しく調整不明	粗(～2.5㎜の砂粒を含む)	並	橙色(Hue7.5YR7／6)	底部完存	12
23	015-02	W1 SH25	壺	－	－	底径 3.8	内：ナデ 外：ナデ	粗(～2.7㎜の砂粒を含む)	並	橙色(Hue7.5YR7／6)	底部完存	17
24	013-02	W1 SH25	壺	－	－	底径 8.5	内：オサエ 外：ナデ	やや密	並	内:灰色(HueN4／1) 外:明黄褐色(Hue10YR7／6)	底部 1／3残	
25	014-02	W1 SH25	壺	－	－	底径 6.3	内：オサエ・ハケ 外：ハケ	やや密(～1.3㎜の砂粒を含む)	並	橙色(Hue7.5YR7／6) 橙色(Hue7.5YR6／6)	底部完存	14
26	013-01	W1 SH25	壺	－	－	底径 5.4	内：ハケ 外：ミガキ・ナデ	やや粗(～3.5㎜の小石、砂粒を含む)	並	内:明赤褐色(Hue2.5YR5／4) 外:にぶい赤褐色(Hue2.5YR5／4)	底部 1／3残	
27	015-03	W1 SH25	壺	－	－	底径 6	内：ナデ 外：ナデ	やや粗(～1.6㎜の砂粒を含む)	並	橙色(Hue7.5YR7／6) 黒褐色(Hue2.5YR3／2)	底部 約1／6残	6
28	014-01	W1 SH25	壺	－	－	底径 8.2	表面風化著しく調整不明	やや密(～1.5㎜の砂粒を含む)	並	黄橙色(Hue10YR8／6) 黒色(Hue10YR2／1)	底部完存	2
29	017-01	W1 SH25	高杯	21.7	23.7	脚径 15.2	内：ミガキ 外：ヨコナデ・ミガキ	粗(～3㎜の砂多い)	並	浅黄橙色(Hue10YR8／3)	口縁部1／8残 脚部1／6残	13・櫛描横線文・シボリ痕残る・透孔三方向
30	014-03	W1 SH25	高杯	26.8	－	－	内：ミガキ 外：ミガキ	粗(～2.7㎜の砂粒含)	並	橙色(Hue7.5YR7／6)	残少量	10
31	019-01	W1 SH25	高杯	25	－	基部径 4.1	表面風化著しく調整不明	やや密(～3㎜の砂粒を含む)	並	橙色(Hue7.5YR7／6,6／6)	口径1／2残 基部完存	20・杯部は内面は、ミガキと見られる
32	019-02	W1 SH25	高杯	－	－	－	表面風化著しく調整不明	粗(～2.5㎜の砂粒を含む)	並	明黄褐色(Hue10YR6／6)	脚部 1／4残	16・櫛描横線文
33	012-01	W1 SH25	高杯	－	－	－	内：ハケ 外：表面風化著しく調整不明	やや粗	並	内:橙色(Hue7.5YR7／6) 外:橙色(Hue7.5YR7／6)	脚部 1／2残	透孔三方向・シボリ痕残る
34	012-02	W1 SH25	高杯	－	－	－	表面風化著しく調整不明	やや粗	並	内:橙色(Hue7.5YR7／6) 外:にぶい黄橙色(Hue10YR7／4)	脚部 1／2残	透孔三方向・シボリ痕残る
35	015-06	W1 SH25	高杯	－	－	－	表面風化著しく調整不明	やや密(～1.3㎜の微砂粒を含む)	並	橙色(Hue7.5YR7／6)	脚部 1／2残	透孔3方向
36	016-03	W1 SH25	高杯	－	－	－	内：ナデ 外：オサエ・ナデ	粗(～3.5㎜の小石、砂多い)	並	内:にぶい黄橙色(Hue10YR7／3) 外:にぶい褐色(Hue7.5YR6／3)	接合部完存	21
37	012-03	W1 SH25	高杯	－	－	－	内：ミガキ・オサエ 外：ミガキ	やや密	並	内:にぶい黄橙色(Hue10YR5／3) 外:褐灰色(Hue10YR6／1) 灰黄褐色(Hue10YR6／2)	脚部接合部のみ残る	シボリ痕残る・透孔一方向
38	015-05	W1 SH25	高杯	－	－	－	内：ハケ 外：ミガキ	密(～1㎜の微砂粒を含む)	並	明黄褐色(Hue10YR7／6)	脚部 1／2残	透孔3方向
39	018-04	W1 SH25	高杯	－	－	底径 9.5	表面風化著しく調整不明	やや密(～1㎜の砂粒を含む)	並	にぶい黄橙色(Hue10YR7／4)	底部 1／8残	1
40	018-06	W1 SH25	高杯	－	－	底径 17.4 基部径 4.0	内：ナデ・ヨコナデ 外：ヨコナデ・ハケ	やや粗(～2㎜の砂粒を含む)	並	内:にぶい褐色(Hue7.5YR5／3) 外:橙色(Hue5YR6／6) 灰褐色(Hue7.5YR5／2)	底部 1／3残	10
41	012-04	C地区 SH25	高杯	－	－	－	内：ミガキ？ 外：ミガキ	やや密	並	内:にぶい橙色(Hue7.5YR7／4) 外:にぶい橙色(Hue7.5YR7／4)	脚部 1／2残	シボリ痕残る・透孔三方向
42	012-05	V1 SH25	高杯	－	－	底径 13.8	内：ハケ・ナデ 外：ミガキ・ナデ	やや粗	並	内:橙色(Hue5YR7／6) 外:浅黄橙色(Hue7.5YR8／6) 橙色(Hue5YR7／6)	残少量	透孔一方向
43	001-01	E7 SH6	壺	13.2	12	底径 5.5	内：ハケ・ナデ 外：ナデ・ハケ	粗(～2.8㎜の砂粒含む)	並	明赤褐色(Hue2.5YR5／6) にぶい褐色(Hue7.5YR5／4)	底径完存	5・6
44	001-03	E7 SH6	甕	－	－	底径 3.7	内：ハケ 外：ナデ・ミガキ	やや粗(～2.2㎜の砂粒含む)	並	にぶい褐色(Hue7.5YR5／4)	口径約1／10残 底部完存	1
45	002-01	E7 SH6	壺	－	－	底径 5.4	内：ハケ 外：ミガキ・ハケ	やや密(～2.5㎜の砂粒含む)	並	橙色(Hue5YR6／6)	底部 約1／3残	2・表面剥離著しい
46	001-04	E7 SH6	高杯	17	－	－	内：ミガキ 外：ミガキ	やや密(～1.2㎜の微砂粒含む)	並	明褐色(Hue7.5YR5／6)	口径約1／16残 極小残存	表面剥離著しい
47	001-02	E7 SH6	高杯	－	－	底径 5.5	内：シボリ・ナデ 外：ナデ	やや粗(～2.2㎜の砂粒含む)	並	橙色(Hue5YR6／6)	脚部 1／8残	3・4・脚部上半に櫛描横線文・透孔三方向
48	003-01	F11 SH7	壺	－	－	底径 8	内：オサエ・ナデ・ハケ 外：オサエ・ナデ・ケズリ	粗(～3.0㎜の砂粒含む)	並	橙色(Hue7.5YR7／6) にぶい橙色(Hue7.5YR7／4、6／4)	底部完存	2

第2表　出土遺物観察表

番号	実測番号	出土遺構	器種	計測値			調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
				口径cm	器高cm	その他cm						
49	003-02	F11 SH7	高杯	−	−	底径 19	内：ナデ 外：ミガキ	やや粗（～1.5㎜の砂粒含む）	並	明赤褐色（Hue5YR5／6）	脚部 1／2残	1-脚部上半に櫛描横線文・透孔三方向
50	018-02	Z4 SH23	台付甕	−	−	底径 6	内：ナデ 外：表面風化著しく調整不明	粗（～2.5㎜の砂粒を含む）	並	灰黄褐色（Hue10YR6／2） にぶい黄橙色（Hue10YR6／3）	台部 1／2弱残	
51	018-03	Z4 SH23	台付甕	−	−	底径 7.6	内：ナデ・ヨコナデ 外：ヨコナデ	やや粗（～2㎜の砂粒を含む）	並	にぶい黄褐色（Hue10YR5／3）	台部 1／2弱残	
52	018-01	Z4 SH23	壺蓋	−	−	つまみ径 4.4	内：オサエ・ナデ 外：オサエ・ナデ	やや粗（～1㎜の砂粒を含む）	並	にぶい黄橙色（Hue10YR7／3.6／3） にぶい橙色（Hue7.5YR6／4）	1／2残	重さ229g
53	018-07	Z4 SH23	高杯	10.2	−	−	表面風化著しく調整不明	やや粗（～2.5㎜の砂粒を含む）	並	橙色（Hue7.5YR6／6）	杯部 1／4残	
54	023-01	Z4 SH23	叩石	長さ 10.05	幅 5	厚さ 3	−	−	−	−	−	
55	008-02	G13 SK9	甕	−	−	底径 6.8～7	表面風化著しく調整不明	粗（1～2㎜の砂粒含む）	並	橙色（Hue7.5YR7／6） 黒色（HueN2／0）	底部完存	
56	006-06	G37 SK21	S字状口縁台付甕	16	−	頚部径 14.1	内：ナデ・オサエ・ヨコナデ 外：ヨコナデ・ハケ	やや密（～1㎜の砂粒を含む）	並	にぶい黄橙色（Hue10YR6／3） にぶい黄褐色（Hue10YR5／3）	口径1／6残 頚部1／5残	口縁部外面自然釉付着
57	010-03	G13 包含層	高杯	−	−	底径 22.4	内：ナデ・ヨコナデ 外：ヨコナデ・ハケ	粗（1～2㎜の砂粒含む）	並	にぶい褐色（Hue7.5YR5／4） 橙色（Hue5YR6／6）	残少量	
58	008-01	E7 SD3	須恵器 甕	26.2	−	−	内：ナデ 外：ナデ	密	並	灰白色（HueN8／0） 灰色（HueN4／0）	口縁部 1／10残	
59	005-04	X2 Pit5	土師器 小皿	8.3	2	−	内：ナデ・ヨコナデ 外：ヨコナデ・ナデ・オサエ	やや粗（～3㎜の砂多い）	並	にぶい橙色（Hue7.5YR7／4）	口縁部 1／4残	
60	005-02	X2 Pit3	土師器 小皿	8.8	1.3	−	内：回転ナデ 外：オサエ・回転ナデ	やや密（～1㎜の砂少）	並	にぶい黄橙色（Hue10YR7／4）	完存	切り込み円板技法
61	005-07	X2 Pit5	土師器 小皿	9.5	2.2	−	内：工具ナデ・ヨコナデ 外：ヨコナデ・ナデ・オサエ	やや粗（～1.5㎜の砂多い）	並	橙色（Hue2.5YR6／6） にぶい黄橙色（Hue10YR6／3）	口縁部 1／3残	
62	005-01	X2 Pit3	土師器 小皿	8.8	1.7	−	内：ナデ・ヨコナデ 外：ヨコナデ・ナデ・オサエ	粗（～3㎜の砂多い）	並	にぶい黄橙色（Hue10YR7／4）	完存	調整不明な部分が多い
63	005-05	X2 Pit3	土師器 小皿	8.9	1.6	−	内：ナデ・ヨコナデ 外：ヨコナデ・ナデ・オサエ	やや粗（～1㎜の砂多い）	並	にぶい黄橙色（Hue10YR7／4）	完存	
64	007-02	X2 Pit3	土師器 小皿	9.4	1.35	−	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	やや粗（～1.5㎜の砂粒を含む）	並	にぶい黄橙色（Hue10YR7／4）	2／3残	高台接地面圧痕あり・底部に糸切り痕残る
65	006-05	X2 Pit3	ロクロ土師器 椀	−	−	−	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	やや密（～1.5㎜の砂粒を含む）	並	内：褐灰色（Hue7.5YR4／1） 外：にぶい黄褐色（Hue10YR5／3）	残少量	底部に糸切り痕残る
66	004-02	X2 Pit5	陶器椀（山茶椀）	−	−	高台径 7.1	内：回転ナデ 外：ナデ・回転ナデ	やや密（～2㎜の砂少）	良	灰黄色（Hue2.5Y7／2）	高台部完存	
67	005-06	X2 Pit5	ロクロ土師器 小皿	9.6	1.6	底径 5.6	内：回転ナデ 外：回転ナデ	やや密（～1㎜の砂多い）	並	にぶい橙色（Hue7.5YR7／4）	底部 4／3残	
68	004-04	X2 Pit3	土師器 甕	18.2	−	−	内：オサエ・ナデ 外：オサエ・ナデ	やや粗（～3.5㎜の小石、砂多い）	並	にぶい黄橙色（Hue10YR7／4）	口縁部 1／5残	風化著しい
69	004-05	X2 Pit5	土師器 甕	19.3	−	体部最大径 22.1	内：オサエ・ナデ 外：オサエ・ナデ	やや粗（～2.5㎜の砂多い）	並	浅黄橙色（Hue7.5YR8／4）	口縁部 1／8残	底部に糸切り痕残る 高台接地面にモミガラ痕残る
70	005-08	X2 Pit5	土師器 甕	−	−	−	内：ナデ・ヨコナデ 外：ヨコナデ・オサエ	やや粗（～2㎜の砂多い）	並	灰色（Hue10YR8／2）	残少量	底部に糸切り痕残る
71	006-01	X2 Pit3	陶器椀（山茶椀）	17.1	5.55	高台径 6.8	内：回転ナデ 外：回転ナデ・ナデ	やや密（～2.5㎜の砂粒を含む）	良	灰白色（Hue5Y7／1） 浅黄色（Hue2.5Y7／4）	口縁部1／2残 高台部1／2残	歪み大
72	004-01	X2 Pit5	陶器椀（山茶椀）	15.9	5.7	高台径 17.8	内：ハケ・回転ナデ 外：ナデ・回転ナデ	やや密（～3㎜の砂少）	良	灰黄色（Hue2.5Y7／2） オリーブ灰色（Hue10Y6／2）	口縁部3／4残 高台部ほぼ完存	
73	007-01	X2 SK29	土師器 小皿	9.2	2	−	表面風化著しく調整不明	粗（～2㎜の砂粒を含む）	並	浅黄橙色（Hue10YR8／2） 灰白色（Hue10YR8／2）	口縁部 1／2弱残	工具の当たり痕残る
74	007-06	X2 SK29	ロクロ土師器 椀	15.2	−	−	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	やや粗（～2.5㎜の砂粒を含む）	並	灰色（Hue10YR8／2）	口縁部 1／6残	
75	010-02	Y3 SK31	土師器 甕	19	−	−	内：工具ナデ・ヨコナデ 外：ヨコナデ	粗（1～2㎜の砂粒含む）	並	浅黄橙色（Hue10YR8／3）	口縁部 1/7残	
76	010-04	Y3 SD26	土師器 杯	15.8	3.25	−	内：ナデ・ヨコナデ 外：ヨコナデ・ナデ	粗（1～2㎜の砂粒含む）	並	灰白色（Hue10YR8／2）	残少量	
77	007-08	Y3 SD26	ロクロ土師器 椀	−	−	底径 6	内：回転ナデ 外：回転ナデ	やや密（～1㎜の砂粒を含む）	並	浅黄橙色（Hue10YR8／3）	底部少量欠く	底部糸切り痕残る
78	007-07	Y3 SD26	ロクロ土師器 椀	−	−	高台径 7.1	表面風化著しく調整不明	やや密（～1.5㎜の砂粒を含む）	並	にぶい黄橙色（Hue10YR7／4） 灰黄色（Hue2.5Y6／2）	高台部 1／4残	底部糸切り痕わずかに残る
79	007-03	X1 SD27	土師器 小皿	8.4	1.9	−	内：ナデ・ヨコナデ 外：ヨコナデ・ナデ・オサエ	やや密（～1㎜の砂粒を含む）	並	にぶい黄橙色（Hue10YR7／4）	1／3残	
80	007-05	V100 SD28	土師器 小皿	5.8	1.25	−	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	やや密（～1.5㎜の砂粒を含む）	並	橙色（Hue5YR7／6）	ほぼ完存	
81	006-03	V100 SD28	陶器椀（山茶椀）	−	−	高台径 7.3	内：回転ナデ 外：回転ナデ・ナデ	やや密（～1㎜の砂粒を含む）	良	灰白色（HueN7／1） 浅黄色（Hue2.5Y7／3）	高台部 1／4残	底部に糸切り痕残る
82	009-04	H38 SK19	土師器 鍋	32.4	−	−	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	粗（1～2㎜の砂粒含む）	並	浅黄橙色（Hue10YR8／4）	口縁部少し残る	外面スス付着
83	010-01	G38 SK20	土師器 鍋	22.6	−	−	内：ナデ・ヨコナデ 外：ヨコナデ・ナデ	粗（1～3㎜の砂粒含む）	並	内：にぶい橙色（Hue7.5YR7／4） 外：浅黄橙色（Hue10YR8／4） 断面：暗灰色（HueH3／0）	口縁部 1/7残	
84	009-03	F11 SD4	土師器 鍋	36.2	−	−	内：ナデ・ヨコナデ 外：ヨコナデ・ナデ・オサエ	粗（1～2㎜の砂粒含む）	並	橙色（Hue5YR6／6） 断面：灰色（HueN5／0）	口縁部 1／12残	外面スス付着
85	006-04	Y3 SD24	土師器 鍋	12.3	−	頚部径 12.0 体部径 21.0	内：ナデ・オサエ・ヨコナデ 外：ヨコナデ・オサエ・ナデ・ケズリ	やや密（～2㎜の砂粒を含む）	並	橙色（Hue5YR7／6,6／6）	口縁部1／3残 頚部1／3残 体部 1／3残	
86	007-04	Y3 SD24	土師器 小皿	9.2	1.4	−	内：オサエ・ヨコナデ 外：ヨコナデ・オサエ・ナデ	やや密（～1.5㎜の砂粒を含む）	並	明赤褐色（Hue5YR5／6）	1／3残	油煙残る
87	006-02	Y3 SD24	陶器椀（山茶椀）	−	−	高台径 8.3	内：回転ナデ 外：回転ナデ・ナデ	やや密（～1㎜の砂粒を含む）	良	浅黄色（Hue2.5Y7／3）	高台部 2／3残	底部に糸切り痕残る 高台接地面にモミガラ痕残る
88	004-03	F35 Pit1	陶器椀（山茶椀）	約14	−	−	内：回転ナデ 外：回転ナデ	やや密（～0.5㎜の砂少）	良	灰白色（Hue10YR7／1）	口縁部 1／10残	渥美
89	005-03	H17 Pit1	土師器 小皿	9.2	0.9	−	内：ナデ・ヨコナデ 外：ヨコナデ・ナデ・オサエ	やや密（～0.5㎜の砂少）	並	浅黄橙色（Hue7.5YR8／4）	2／3残	
90	008-03	C地区 包含層	土師器 小皿	7	0.9	−	内：ナデ・ヨコナデ 外：ヨコナデ・ナデ・オサエ	粗（1～2㎜の砂粒含む）	並	橙色（Hue5YR7／6）	1／3残	
91	008-04	C地区 包含層	土師器 小皿	9	1.75	−	内：ナデ・ヨコナデ 外：ヨコナデ・ナデ・オサエ	やや粗（1～3㎜の砂粒含む）	並	浅黄橙色（Hue10YR8／4）	1／4残	
92	009-02	H18 包含層	土師器 鍋	39.2	−	−	内：ナデ・ヨコナデ 外：ヨコナデ・ナデ・ケズリ	やや粗（1～2㎜の砂粒含む）	並	内：橙色（Hue5YR6／6） 外：にぶい橙色（Hue5YR6／4）	口縁部 1／9残	外面スス付着
93	009-01	包含層	土師器 鍋	43	−	−	内：ナデ・ヨコナデ 外：ヨコナデ・ハケ	やや密（1㎜の砂粒含む）	並	橙色（Hue5YR6／6）	口縁部少し残る	外面スス付着
94	004-06	F7 Pit2	銭貨	−	−	−	−	−	−	−	4／5残	寛永通宝、裏面に記号等なし
95	008-05	H16 包含層	銭貨	−	−	−	−	−	−	−	完存	寛永通宝、裏面に記号等なし
96	008-06	H16 包含層	銭貨	−	−	−	−	−	−	−	完存	寛永通宝、裏面に記号等なし

第3表　出土遺物観察表

のである。

4　江戸時代

Pit 出土遺物（94）　出土遺物には、銭貨が１枚である。「寛永通宝」で「永」の部分が欠損している。裏面に記号等は、ない。

包含層出土遺物（95～96）　出土遺物には、Pit 遺物と同様「寛永通宝」である。１枚は、かなり文字が潰れていて判別し難い。裏面に記号等は、ない。

（萩原義彦）

①斎野裕彦・松山聡・山村信榮「大型石包丁の使用痕分析」（九州古文化研究会　古文化談叢　第42集　1999年）
「田能遺跡発掘調査報告書」（尼崎市教育委員会　1982年）
上村安生「三重県の石器」（『農耕開始期の石器組成４』国立歴史民俗博物館　1997年）
P897～930まで
②「山中遺跡」（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第40集　愛知県埋蔵文化財センター　1992年）　P120参照109の土器に類似し、杯部外面の横方向のミガキが丁寧である。狭間Ｉ式に当てはめることができよう。
③山田猛ほか「山城遺跡・北瀬古遺跡」（三重県埋蔵文化財センター　1994年）　P60参照
④福田哲也ほか「ヒタキ廃寺・打田遺跡・阿形遺跡ほか」（三重県埋蔵文化財調査報告99－2　三重県埋蔵文化財センター　1992年）　杯部は出土しなかったもののP75の遺物番号75及びP108の遺物番号156の脚部に相当すると考えられる。しかし、器台形と解釈されるているがここでは、高杯として扱う。
⑤伊藤裕偉「楠ノ木遺跡」（三重県埋蔵文化財調査報告101－3　近畿自動車道（勢和～多気）埋蔵文化財発掘調査報告―第３分冊―　1991年）　P53以降を参照としていることが多い。
⑥藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」（研究紀要　第３号　1994年）P111以降を参照とした。
参考　遺物においては、伊藤裕偉・上村安生・水谷豊・原田恵理子各氏から助言を頂いた、ここに記して感謝したい。

［遺物観察表註］

報告書に掲載した遺物の観察表は、以下の規則によって作成した。

1　観察表左端の番号は、各遺物実測図の番号に対応する。これは、器種、材質如何を問わず通し番号である。ただし、これは掲載した実測個体のみであり、実測図を作成できない破片には番号をふっていない。したがって、この番号が遺物の全てではない。

2　実測番号は、実測をした際の番号で出だしの３桁は、用紙の番号で、後側の２桁は、用紙内での実測した順序の番号である。

3　出土遺構は、上段に地区番号を表し、下段に遺構番号を明示している。地区・遺構番号は、遺構平面図及び遺構一覧表を参考されたい。

4　計測値について記載した口径・器高・その他はそれぞれ最大値をとっている。また、「－」は、計測できないものを表している。単位は、記載のとおりcmである。その他は、高台径・底径・つまみ径などを表す欄である。

5　調整技法の特徴は、あくまでも成されている調整について記述しており調整順序によるものでない。

6　胎土については、粗密を記し、括弧内に小石・砂粒の有無や大小について記述する。

7　焼成については、良・並・不良の３段階に分けて、その中間に位置する場合はややを付記している。

8　色調については、『新版　標準土色帖』（小山・竹原編19版　1997年）に基づいて表記した。

9　残存については、遺物の部位においての割合で表記している。「－」は、表しきれないものである。

10　備考の欄には、その土器における特徴的な事柄を記載しているか、遺物取り上げの際の番号などを表記している。

V　まとめ

今回の調査によって、弥生～古墳時代にかけての竪穴住居及び鎌倉時代の掘立柱建物・塀・土坑を検出することができた。また、遺物もまとまって各遺構から出土した。成果と今後の課題について考えたい。

1　弥生～古墳時代

1）石包丁

調査した竪穴住居から石包丁及び未製品が出土している。過去の調査で赤垣内遺跡[1]・中楽山遺跡[2]など弥生時代後期においても石包丁が出土している。さらに、この丘陵上の各所において表採されている。また、各遺跡から出土している石包丁の素材は、緑泥片岩であり、それを産出する地域に近いことを考慮するとこの丘陵上の遺跡は、石包丁の生産要素を持つ集落である可能性を有している。さらに、この地域では、石包丁は古墳時代初頭まで存在していたと考えてよかろう。

2）竪穴住居

調査した範囲内において炉跡を検出することができなかった。周辺部において発掘調査された後期とみられる竪穴住居についても同様である。しかし、当調査地からほぼ東に位置し、外城田川及び宮川に挟まれた地域の中楽山[2]・野垣外遺跡[3]やさらに宮川の南、勢田川右岸の隠岡遺跡[4]においての竪穴住居では、炉跡とみられる焼土痕跡を認められる。今回では、確認できなかったが今後の調査によっては、検出することができるかも知れない一方、屋外炉が存在する可能性や竪穴住居の利用方法に起因するものかもしれない。

3）集落

前期では、土坑を検出した仲垣内遺跡がある。つまり丘陵南側において集落が存在したことを窺わせる。この時期においては、金剛坂遺跡・大藪遺跡・上の山遺跡といった他の集落とほぼ同時期に成立した集落と考えてよいのではないだろうか。

中期には、発掘調査において明確されていないが、中期後半とみられる弥生土器が出土している鳥取山遺跡[5]がある。また、過去の調査においても遺構・遺物等確認されていないため、丘陵中央部付近に営まれていたと考えるのが妥当であろう。

後期には、仲垣内・赤垣内遺跡で竪穴住居を検出している。赤垣内遺跡では、高床式倉庫と考えられる掘立柱建物があり、中心域を形成していたかもしれない。

発掘調査では、重複するものを含め竪穴住居６棟を検出することができ、集落が営まれた状況が窺える。また、調査対象地が地形的な状況（丘陵縁辺部）を踏まえて考慮すると集落の中心部からはずれていると推測される。

4）小結

この丘陵上で営まこの集落は、弥生時代を通して拡大縮小を繰り返しながら丘陵上に立地していたと考えてよいのではないか。この集落が長期にわたって存在し続けた基盤には、石包丁にみられるような生産性を保持していたためとみられる。

さらに、この集落は丘陵上において古墳時代後期に一部みられるものの引き続いていないことを考慮すると、次第に低地の地域に移動していったか吸収・統合されたとみられる。近域に所在する小社遺跡[6]であろうか。この集落が他所に移行する状況は、自然・社会環境の変化に起因するものであろう。

2　鎌倉時代以降

1）溝

ＳＡ42の西側、ＳＢ37の西側、ＳＡ44・45に挟まれた溝から時期を判別できるような遺物は、出土していない。しかしながら、それぞれの溝は、掘立柱建物や塀とみられる遺構を分けるような形をとって存在する一方、丘陵の地形に対してやや放射状に掘削されている。おそらくほぼ同時期に存在していたとみられる。また、集落内の土地利用において個々の建物を分離する役割として区画の意味を有していたと考えてよいのではなかろうか。

2）塀

ＳＡ42・43・44・45・46と各所において検

出した。ＳＡ42は、西側との境を成すものであろう。ＳＢ38の西側では、区画溝を挟んで両側にみられる。ＳＡ46は、ＳＢ39の一環としての塀であろう。Ｃ地区ＳＢ40の東側の柱穴（竪穴住居内のもの）も塀の一部と想定できそうである。

3）井戸

Ａ地区内で１基、Ｂ地区内で３基存在している。Ａ地区のＳＥ22は、ＳＢ36のほぼ東側に位置している。調査では、重機によって掘削したものの井戸底に至ることができず、おそらく丘陵下の低地に至る深さまで掘削されていると考えられる。この井戸は埋没していたが、Ｂ地区のＳＢ37・ＳＢ38の北東から東にある井戸は、時期が不明瞭である。この２つの井戸から出土しているもの近世以降のものが含まれるがＳＥ22の深さを考慮すれば長期にわたって開口していた可能性がある。

4）建物など

Ａ地区ＳＢ36・Ｂ地区ＳＢ37は、検出した建物の中では、大型に属する。他の建物は、概してやや小型である。しかし、区画溝・塀・井戸の位置関係から小型とはいえ主たる家屋と考えられる。

また、ＳＢ38の東側において検出したＳＫ14は、南側から出入するように階段状になっており、北側に排水路的な溝が取りついている。ＳＫ14の時期は、不明でありＳＢ38に関連する要素を持つ施設かもしれない。

5）小結

調査区内のそれぞれの建物及び付随施設は、丘陵縁辺部の弧状に巡る地形を利用しながら家屋を構え、各々の区域の展開状況を示しているとみられる。凡そ、放射線状の配置的要素もって集落が形成されていたと考えてよいのでは、なかろうか。今回の調査によって判明したことは、丘陵上で集落を形成するうえでの土地利用のあり方の一例をしめしたものであろう。[7]

3　課題

今回の調査によって弥生～古墳時代初頭・鎌倉時代の集落跡と言えそうであるが、過去の調査や周辺域の遺跡を含めて考えると古墳～奈良時代[8]にかけては、不明瞭なことが多い。古墳時代前期では、各所に所在した弥生時代からの集落が一斉に姿を消して、一ヶ所にまとまり古墳を築造する基盤になったとみられる。なぜこの様な変化もたらしのであろうか。また、この地域は、古墳時代後期とみられる古墳の数に見合う集落が少なく、どのような社会によって成立していたのであろうか。

さらに、古墳時代末から奈良時代にかけての原窯跡といった多くの窯跡（外城田窯跡群）があり須恵器生産地域としても重要な地域にもかかわらず、その生産を担っていたとみられる集落も未知である一方、斎宮との関与といった事柄が今後の課題といえよう。

中世とよばれる鎌倉から室町時代にかけては、過去調査によって次第に判明しつつある[9]がここでの調査による成果がその一助になることを期待したい。

（萩原義彦）

［註］

①「赤垣内遺跡」（『昭和48年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会　1972年）　P42
Ⅲ　出土遺物

②「中楽山遺跡」（『昭和47年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』　三重県教育委員会　1973年）　P102

③「野垣内遺跡」（『昭和48年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』　三重県教育委員会　1979年）

④岩中淳之「隠岡遺跡発掘調査報告」（伊勢市教育委員会　1987年）

⑤「玉城町史　上巻」（玉城町教育委員会　1996年）　P274
鳥取山遺跡出土土器が掲載されている。

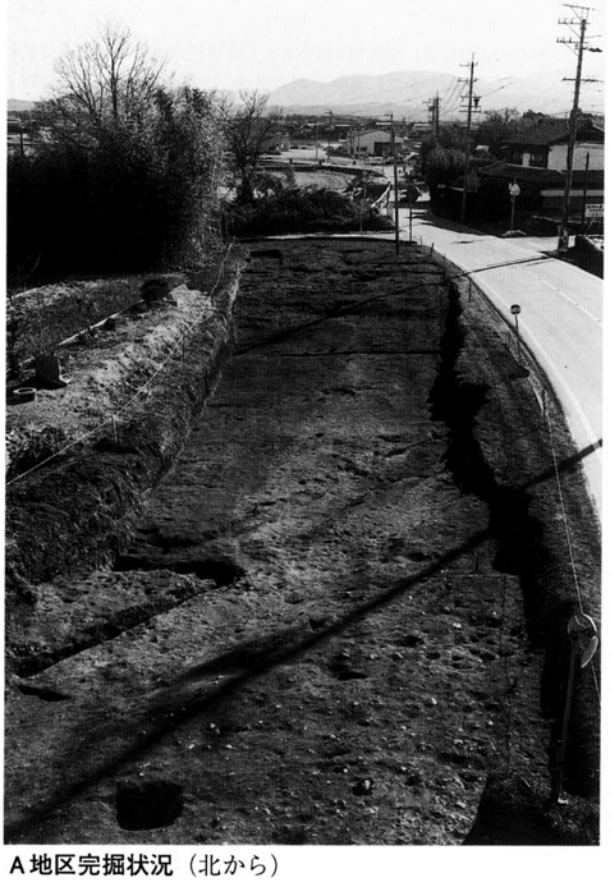
⑥「玉城町史　上巻」（玉城町教育委員会　1996年）
P293　小社遺跡ウエ松地区の発掘調査によって大規模な集落であろうと想定されている。　P394
また、石釧が表採されており、前期古墳の存在も窺わせ、前期古墳を築造しうる権力基盤を有していたと考えられる。

⑦久居市上野遺跡では、河岸段丘上で方形区画によって整備された屋敷地が確認されている。「上野遺跡だより」（久居市教育委員会　上野遺跡調査団）2001.3.24　№4

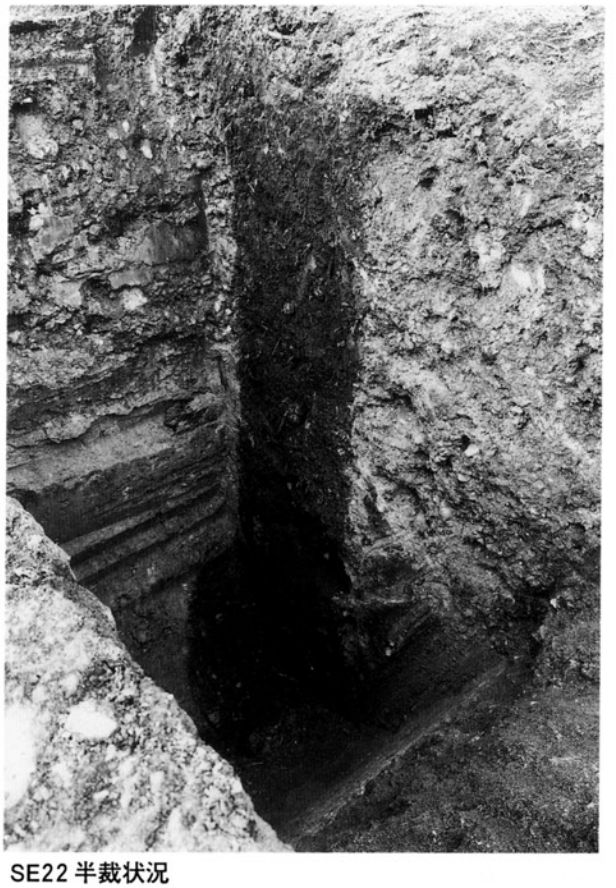
⑧時代区分について、７世紀を飛鳥時代とするケースもあるがここでは、７世紀末から奈良時代とし、それ以前を古墳時代と区分している。

⑨鎌倉～室町時代にかけての調査の成果として代表的なものは、楠ノ木遺跡・蚊山遺跡・上ノ山遺跡・波瀬Ｂ遺跡の調査があり、この時期の集落の変遷を窺える。

A地区完掘状況（南から）

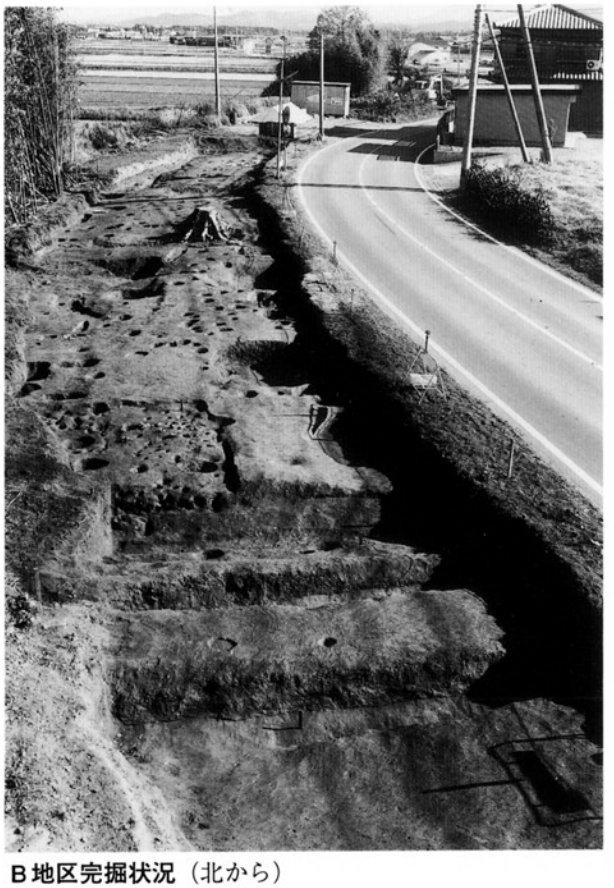


A地区完掘状況（北から）



SE22 半裁状況

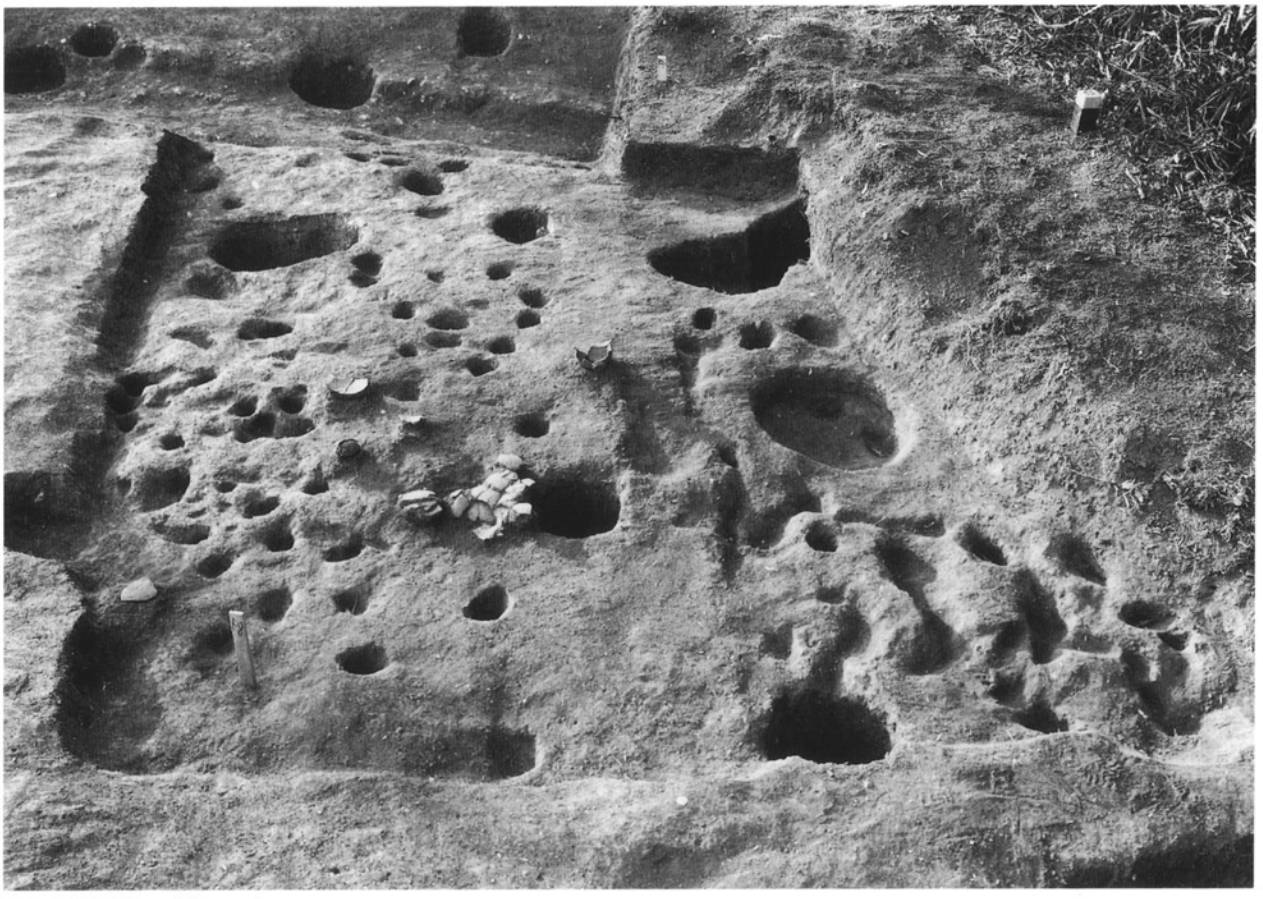
図版 2



B 地区完掘状況（北から）

B 地区完掘状況（南から）

SB37 完掘状況（南から）



SH7 完掘状況（南から）

SH6 完掘状況（南から）

C地区完掘状況（南から）

図版 4

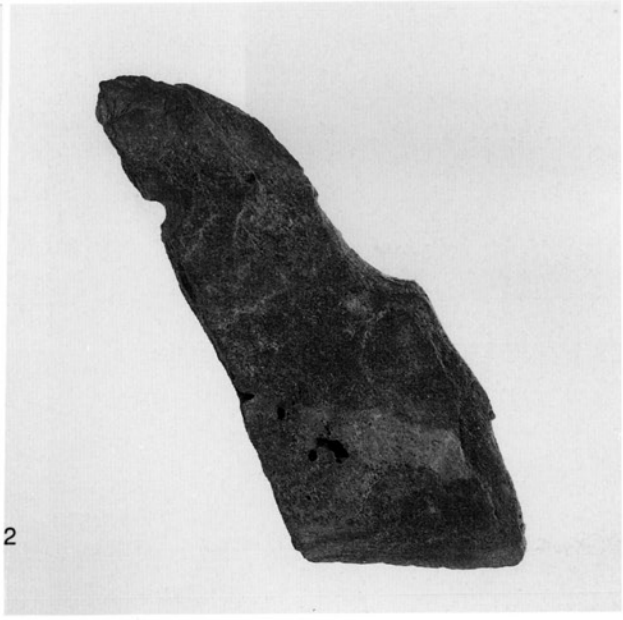
C地区完掘状況（北から）

SH25 遺物出土状況（南から）

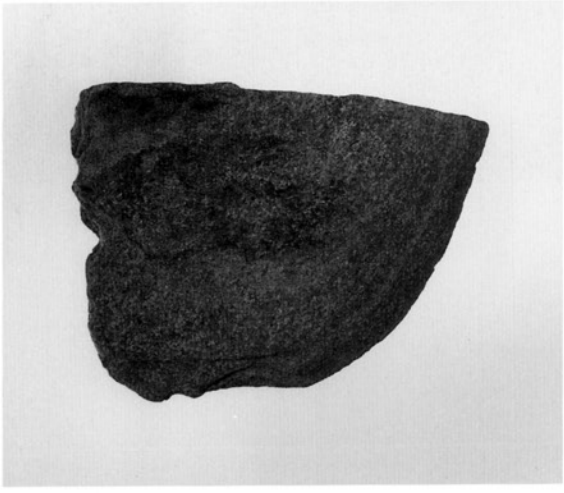
SH25 完掘状況（南から）

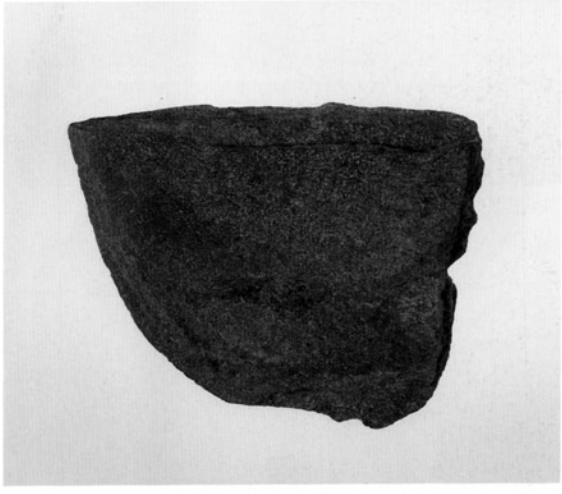
SH23 完掘状況（南から）

図版 6



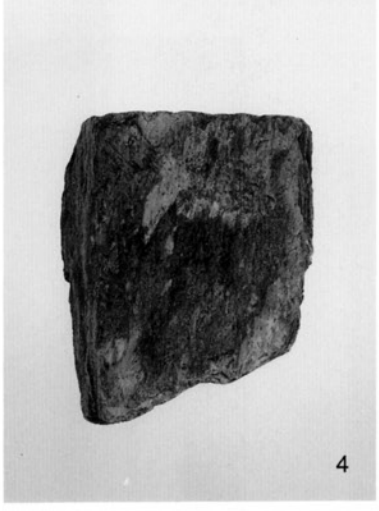
2





3

1



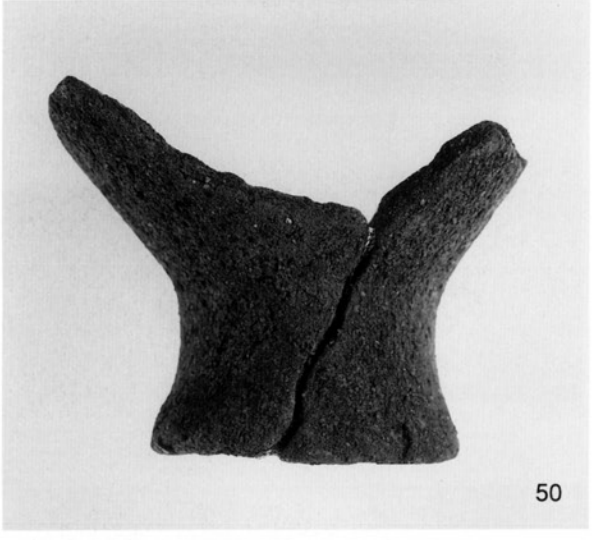
4

8

29

31

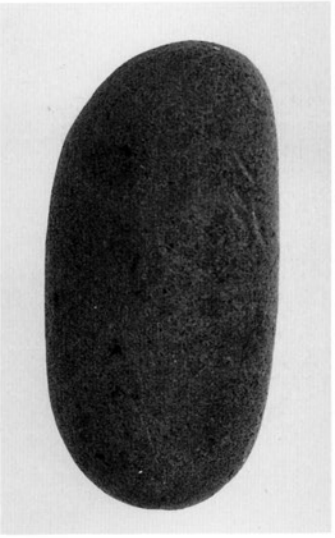
43


50

48

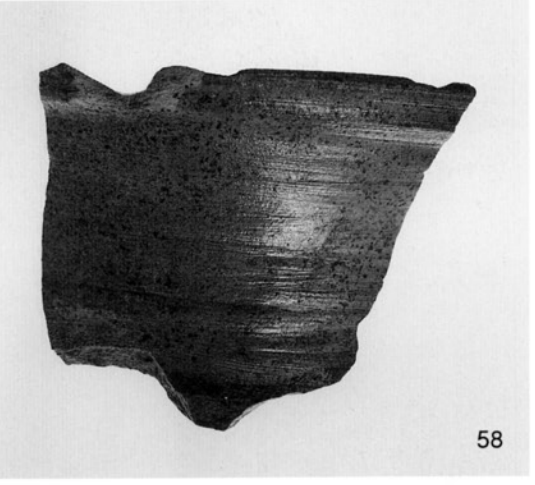
53

図版 8



54

57



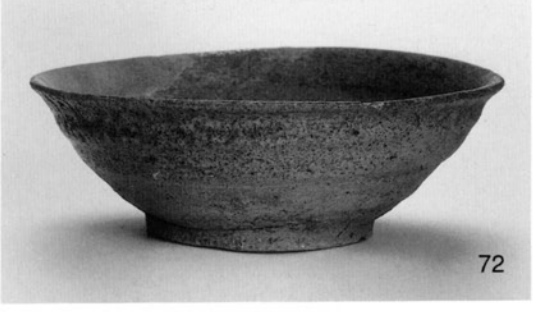
58

62

63

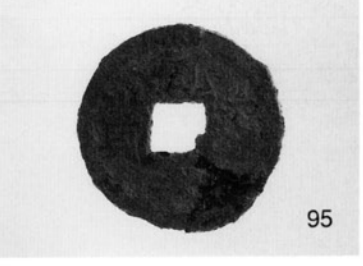
71

85

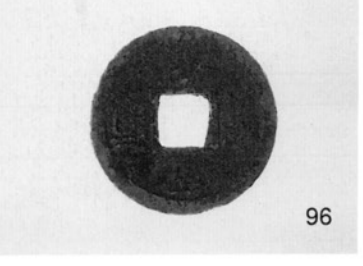


72

94



95



96

報告書抄録

ふりがな	のじのさとなかいせきはっきつちょうさほうこく
書名	野篠里中遺跡発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	235
編著者名	筒井英俊・萩原義彦
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515－0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 0596－52－1732
発行年月日	西暦2002年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
のじのさとなかいせき 野篠里中遺跡	みえけんわたらいぐんたまきちょうのじの 三重県度会郡玉城町野篠	24461	169	34° 28′ 59″	316° 37′ 13″	2000.10.20 ～ 2001.01.15	1,500m²	平成12年度 （主）伊勢多気線緊急地方道路整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
野篠里中遺跡	集落跡	弥生～古墳時代	竪穴住居	壺・壺蓋・台付甕・甕・高杯・石包丁・叩石・石鏃	欠山期の石包丁
		鎌倉～室町時代	掘立柱建物・塀・井戸	土師器甕・鍋・小皿・ロクロ土師器皿・椀・陶器椀（山茶椀）	中世の集落跡（丘陵縁辺部における集落構造を窺える）
		江戸時代	土坑	銭貨	江戸時代における街道筋

平成 14(2002) 年 3 月に刊行されたものをもとに
平成 19(2007) 年 12 月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告２３５

野篠里中遺跡発掘調査報告

２００２年3月

編集・発行　三重県埋蔵文化財センター
印 刷 者　東 海 印 刷 株 式 会 社